

実践報告

AI プロンプトを用いた 大学生の英語スピーキング能力開発

—AI と教師による学習者の自律学習支援—

柳瀬 陽介*

要 旨

本実践報告は、2025 年度前期の選択科目 Active Listening I において実施した、AI プロンプトを用いた英語スピーキング指導の成果を分析する。受講生 19 名が 13 週間にわたり、筆者が独自開発した 9 種類の AI プロンプトを使用して英会話練習を行った。5 件法アンケートでは「AI 英会話が英語力向上に役立った」に平均 4.8 点（5 点満点）の高評価を得たことを始めとして、すべての設問で本実践に対する高評価（平均 4.4 ～ 5.0 点）を得た。226 篇の AI 英会話報告書の質的分析では、学習者が初動期・向上期・安定期・発展期の 4 段階を経て発達したことが伺えた。加えて AI 英会話時間から分類した 4 種類の学習者（8 名）の学習過程についても分析した。本実践は、教師が学習者の自己調整学習を尊重しつつ適切な支援を行うことで、学習者の自律的で探究的な AI 活用が英語スピーキング力を高めることを示した。

【キーワード】人工知能（AI）、英語スピーキング、プロンプト設計、学習者の自律性、ユーザー・イノベーション

1. はじめに

生成的人工知能（generative artificial intelligence—以下 AI と略記する）が急速に浸透する中、AI を「普通の」テクノロジーとして認識し、人間がどうコントロールするかを具体的に検討すべきだという見解が説得力を帯び始めている（Narayanan & Kapoor, 2025）。汎用人工知能（AGI）や人工超知能（ASI）の厳密な定義すらない現状では、大学人も、AGI や ASI を前提とするユートピア論やディストピア論に時間を費やすよりは、英語圏の大学を中心に学生の AI 利用が広がっている現実（Bogost, 2025）に対応するべきだろう。

教育目的での AI 使用については、学習者の学習活動を単純に置き換えるのではなく、学習活動を向上するために活用すべきであるという考え方が、一般的な合意として形成されつつある。教師は各々の担当科目において、適切な AI 活用の方法を明確に示し、その方針の教育的意義について学習者に十分な理解を得る必要がある。

英語スピーキングについては、AI の活用が大きな期待を集めている。これまで、学習者の英語スピーキング能力増強のために AI を活用する試みは世界各地で報告されている。Du & Daniel

* 京都大学国際高等教育院

(2024) は、2017 年から 2023 年までに実施された AI chatbot アプリケーションによる英語スピーキング力向上を検証した 24 件の実証研究をレビューし、このような AI 利用は初期段階にあるものの効果が認められ、今後の発展が期待できると報告した。一方、Guan, Li, and Gu (2024) は、アプリケーションではなくチャット UI による教室外英語学習に関する 15 件の実証研究をメタ分析したが、そこで AI が利用者の英語力と自己調整学習に肯定的な効果をもたらすと報告した。

これらの先行研究は AI 活用への期待を高める貴重な知見を提供している。しかし、これらが総括している研究は主に比較実験デザインによるものであり、教育実践者にとって重要な AI の使用と適応に関する具体的な詳細を十分に記述していない。AI を活用したスピーキング指導を今後発展させるためには、実際の教師が試行錯誤を重ねながら行った実践の詳細な記録とその分析が重要となる。よって、筆者は教育実践者にとって有用と思われる具体的記述を重視した分析的な実践報告をまとめることとした。

本実践報告の目的は、2025 年度前期に筆者が指導した本学の選択科目 Active Listening I において、学習者がいかに AI プロンプトを使った英会話¹で英語スピーキング能力の向上を図ったか、そして教員である筆者がいかに学習者の自主学習を支援したかを、分析的に報告することである。これにより、AI 時代における英語スピーキング教育の新たな可能性と課題を実践的に明らかにすることを目指す。ただし、本報告は、京都大学教養・共通教育という文脈で行われた一事例の分析であり、その文脈を越えた過度な一般化や因果関係立証を狙うものではない。

2. 方法

本報告が利用する 2025 年度前期 Active Listening I における研究データの収集と利用は、筆者が所属する国際高等教育院への研究倫理申請（2024 年 12 月 16 日に国際高等教育院研究倫理審査委員会で承認・承認番号 2024-08）で認められている。筆者が作成したアンケート（詳しくは後述）以外のデータは、すべて教育目的のために学習者が提出した課題の記録を二次的に利用したものである。受講生は、データは完全匿名化し、受講生の名誉を汚すことがない形で公開されることに書面で同意している。

2.1 予備的試行

2022 年 11 月末の ChatGPT 登場以来、英語教育における AI 利用のほとんどは、ライティング領域のものであった (Lo et al., 2024)。筆者もライティングでの AI 活用実践を行った (柳瀬, 2025a) が、同時に、2023 年 4 月の年度初めに筆者は、自分としては初めての英会話 ChatGPT プロンプト (後述する Tutor) を作成・公開した²。スピーキング指導における AI の大きな可能性を予感したからである。この段階での AI 英会話は、Chrome 拡張機能 Voice Control for ChatGPT を通じて学習者の音声を変換するものであった。

2023 年度に、筆者は英語ライティング-リスニング A/B (Writing-Listening) とアクティブリスニング (Active Listening³) の 2 種類の科目を指導した。Writing-Listening は 1 年生全員の必修科目で、筆者は、最終評価への最大 10% の特別加点となる「ボーナスポイント」の任意活動として、学生に AI 英会話プロンプトの使用を奨励した。希望する学生には学習成果をまとめた AI 会話報告書の提出を求めたが、約 20 名のクラスで提出した学生は 2 名前後であり、その提出回数もセメスターで数回であった。

選択科目であり、受講する学生は概して英語学習意欲が高い Active Listening では、2023 年度後期に AI 英会話プロンプトを任意の選択活動として導入した（前期はこのコースの初めての試行実施であり、コース運営に集中した）。後期のセメスター最後まで学習を続け合格した 27 名の学生のうち毎週 8 ～ 9 名がセメスター前半に報告書を提出したが、セメスター後半には 4 ～ 6 名に減少した。

2024 年度前期の Active Listening でも、AI 英会話を任意活動として奨励した。合格した 19 名の学生のうち 4 ～ 6 名が毎週報告書を提出した。これらの実践で、選択科目を履修する意欲的な学生でも、任意参加では約 25 ～ 30% の受講生しか AI 英会話に参加しないことがわかった。同時に、提出された報告書の内容から学習者はこの活動を有意義と認識していることが確信できたため、筆者は 2024 年度後期から AI 英会話活動を正式な評価の一部として組み込むことを決定した。

2024 年度後期の Active Listening の評価方針は、授業参加 20%、毎週のリスニング活動報告書 40%、期末試験 30%、毎週の AI 会話報告書 10% として、AI 英会話を正式な評価対象の一部とした。セメスター最後まで学習を続け合格した 27 名のうち、ほとんどの者は毎週報告書を提出した。27 名の 13 回にわたる報告書（合計 282 篇）の評定の平均点は 8.9 点、標準偏差は 1.0 点、最大値は 10 点、最小値は 6 点、中央値は 9 点であった。なお、筆者の最初の AI 英会話プロンプト（Tutor）以外の 8 つのプロンプト（詳しくは後述）は、学習者の反応を聞きながら、このセメスターの間に順次開発し公開した。

2.2 本報告の対象である 2025 年度前期の実施

2.2.1 実践概要

2025 年度前期の Active Listening I では、2024 年度後期の実績を踏まえて授業評価に正式に組み込み、実践報告の対象とすることにした⁴。筆者は、上述の研究倫理審査を経て、受講者全員から研究・教育目的でデータを引用することの承諾を得た。さらに、毎週の報告書提出においては、その文章の教室内での匿名共有の可否を学生に報告書内で尋ねた。セメスター終了後・教室外での匿名データ引用は許可しても、セメスター中・教室内での匿名データ共有には抵抗を示す学生の存在が、前年度の Writing-Listening の授業アンケートの結果からわかったからである。本報告は、教室内引用の共有承諾を得られなかったデータは数的データとして含めるに留め、具体的なコメントは引用していない。

2025 年度前期の Active Listening I には 22 名が授業登録をしたが、1 名は初回のみの出席であり、もう 1 名は数回出席したものの課題提出は 1 回だけであり単位認定はしなかった。残り 19 名はすべてもしくはほとんどの授業に出席し、期末テストの成績も良好だったので単位を認定した。受講生の学年は、1 回生から 4 回生までのすべての学年におよび、大学院生も 1 名参加した。18 名が日本語を母語とし、1 名が日本語以外を母語としていた。

評価配点には少し変更を加えて、授業参加 20%、毎週のリスニング活動報告書 30%、期末試験 30%、毎週の AI 英会話報告書 20% とした。AI 会話英会話の配点を 10% 増やし、その分の配点をリスニング活動報告書から差し引いた。AI 英会話報告は 13 の週において要求された。シラバスでは、「教室は、学習者が安心して間違い、その間違いから学ぶ場所」という授業方針を掲げ、「授業のねらい」の冒頭文は、「他律的な英語学習者から自律的な英語ユーザーへと成長を遂げることを目指します」とした。AI 英会話における音声入力認識については、OpenAI 社の voice input feature⁵ を推奨した。授業は以下の手順で進行了た。

A) 授業前: A1) 学習者は自学に基づく AI 英会話報告書およびリスニング活動報告書を提出する。A2) 教師は報告書を読んで採点し、教室での引用共有箇所を決定する。

B) 授業中: B1) 教師は、報告書中の印象的なコメントをスライドで共有し、コメントを英語で加える。B2) 学習者は、提出した報告書の内容に基づいて 10 分間英会話を行う。B3) 教師は、解説動画⁶を使って、ボトムアップリスニング指導を実施する。B4) 教師は、学生のリスニング活動報告書作成の参考となる動画の推薦を行う。

2.2.2 スライド標語

筆者は、学生が提出した AI 会話報告書とリスニング報告書のコメントの一部を教室内で共有する際は、筆者が AI で作成したイラストや写真風の画像を背景にし、学習促進のための標語を掲載したスライドを用いた。印象的な視覚イメージと共に、英語学習上重要な原則や方略を伝え、望ましい学習習慣を学習者に定着させるためである。これらの標語は、本実践の指導方針を示すものであるため付録 A に掲載する。なお筆者はこれらの標語がついた AI 画像付きのスライドについての著作権は放棄しているので、希望者はこれらをダウンロードして利用することができる。

2.2.3 利用した AI プロンプト

市販の AI 駆動英会話アプリケーションが数多く登場する中、本実践では独自のプロンプト設計（具体的なプロンプトは付録 C を参照）による AI 英会話促進を行った。現在市場に流通する AI 英会話アプリケーションの多くは、構文基盤で設計されており、活動の中心は、特定の構文のマスターになっている。場面や状況別のユニット構成を採用していても、その実質的な目標は当該場面・状況で使用頻度の高い構文の習得に置かれている。これに対し、筆者が開発した AI プロンプトは内容基盤型のアプローチを採用している。筆者のプロンプトは、話す内容—話者の想い（image）—の決定権を原則として学習者に委ねる。ただし、学習効果を考慮し、学習者にとって有用と思われる構文は会話終了後に提示する機能も併せもっている。

この構文基盤か内容基盤かという対立軸は、カリキュラム中心の学校内言語学習と学習者中心の学校外言語獲得の対比とも重なっている。学校言語教育に対する批判的見解では、学習者が特に表現したいとも思わない言語形式をカリキュラムにしたがって練習することの意義が時に疑問視されるが、筆者も、高校英文法をある程度マスターした大学生に関してはこの批判には一定の合理性がある⁷。また、人が発話を試みる際に意識に上るのは、多くの場合、内容（想い）であり、特定の構文（言語形式）ではない⁸。したがって、筆者のプロンプトは特定構文の学習と習得を第一目的としていない。特定の言語形式は、学習者が自ら語りたい内容について苦勞して表現した後に学ばれるよう設計されている。具体的には、学習者が発言した後の、AI による言い換え機能と要約機能で、発話後の学習者の学びを促進している。筆者のプロンプトは、言語形式と学習者の意思を比較するなら、学習者の意思を優先している。

言い換え機能: 筆者が開発したプロンプトのほとんどは、学習者が発話する度に AI が内容確認という形で、学習者の英語を、より自然な英語表現に言い換えるようにしている。この言い換えプロセス（recast）は、明示的な訂正という形を取らないため、学習者は自らの英語が正されているという否定的感情を抱くことなく、自らの意図に忠実な英語表現の学習を進めることができる。

要約機能: ほぼすべてのプロンプトは、学習者が会話終了の意思を表明すると AI が会話内容の要約を提示する。この AI が生成する要約は、たいていの学習者の英語表現よりも自然な英語表現を使っているため、学習教材として有効に機能する。筆者はこの AI 英語要約を音読することを特に学習者には勧めた。2025 年 6 月からは、すべてのプロンプトにおいて AI 要約を学習者を “I” と

する一人称視点で生成するよう指示を修正した。それまでのいくつかのプロンプトの要約はAIが“I”で学習者が“you”という視点で記述されていたが、学習者を一人称とする要約により、学習者がそれを共感的に音読できる環境を整備した。

このAIによる言い換え機能と要約機能は、学習者が英語表現に挑戦した後に、その挑戦に即した、学習者専用の英語教材を与える機能であるといえる。AIによって、学習者が知りたい表現を知りたい時期に提供し、学習を個別最適化する機能といってよい。また、筆者は、学習者がこの要約をAI英会話報告書に直接コピーすることを許可した。2024年度の予備的实践期間中、筆者は学習者が自ら英語で要約をまとめることを有益な学習活動と考えていた。しかし、英語学習に対して極めて熱心でありながら、所属学部の専門科目の学習に追われ学習効率を重視する1名の学習者は、筆者の指示に従わずAIに会話要約をさせてそれを報告書にコピーし続けた。当初、この明らかなAI生成要約を目にした筆者は、これを怠惰な行為と考えた。だが、これはコストパフォーマンスを重視する現代の学習法の一形態であると次第に認識を改め、2025年度からは学習者のAI英会話の要約記録作成をAIに委ねる方針に転換した。

操作方法：学習者がAIと英会話をする際には、マイクアイコンとスピーカーアイコンをクリックして発話と聴取のタイミングを学習者が決定するクリック制御型の操作方法を推奨した。この方式により、学習者は英語発話の時間を自由に調整できるし、AI音声の聴取が不十分な場合は何度でも一必要ならば画面に表示される文字出力を同時に読みながら一聴取を行うことが可能となる。また、クリック制御によってAIが言い換えた表現を時間をかけて確認することもできる。このクリック駆動型の会話は、パソコンやスマホに一切触ることなく会話を続けるハンズフリー会話に比して不自然な印象を与える。だが、英語発話に苦勞する学習者への教育効果は高いと筆者は判断し、このクリック制御型の会話を推奨した。

ただし、希望する学習者にはハンズフリー会話方式（以下でプロンプト比較をする場合はVoiceと略記）の選択も認めた。しかし、実践時期のハンズフリー型ではクリック駆動型のようにプロンプトによる事前指示ができなかったため、上述の自動言い換えや要約などの学習支援機能がなかった。ハンズフリー方式は、提出された226篇の報告書のうち28篇で選択されていたが、そのうち20件は特定の2名の学習者によるものであった。したがって、ほとんどの学習者は、筆者のプロンプトを使ったクリック駆動型でAI英会話を実施したことになる。

なお、開発したプロンプトは、すべてAIのカスタム機能（ChatGPTならGPTs、GeminiならGems）でも使用可能な設計としている（公開可能なChatGPTのGPTsのURLは付録Bを参照）。カスタム機能により学習者はいちいちプロンプトを利用中のAI入力欄に貼り付ける必要がなくなる。これらのカスタム機能は、スマホやタブレットでも利用可能である。なお学習者がChatGPTとGeminiのどちらかを使ったかについては、AI英会話報告書に記入欄を設置していなかったため原則として不明である。Geminiは2025年6月に大学生を対象として有料版の15ヶ月間の使用料を無料とするキャンペーンを行ったので、それによって多少はGeminiの利用は増えたかもしれないが、多くの学習者は知名度にまसरChatGPTを使ったように思える。

2025年度前期授業に学習者に使用させた9個のプロンプトは、全部合わせると10ページの文書となる分量を有する。よって、本報告ではもっとも利用頻度の高かったTutor（詳しくは後述）を付録Cに掲載するだけに留めた。他のプロンプトは、付録Cの末尾に掲載されたURLを経由してクラウドサービスで原文をダウンロードできるようにしている。また、開発したプロンプトは継続的な改訂行っているため、プロンプトの最新版は、同じく付録Cの末尾にURLを掲載した筆者

のブログで確認・利用が可能な体制を構築している。筆者はプロンプトの著作権を放棄しているので、読者によるプロンプト利用は自由である。

筆者のプロンプト記述形式は、元来、構造的なプロンプトであったが、一時期、一部のプロンプトを OpenAI の GPT Builder の自動プロンプト作成機能で作った。しかし、この自動作成方法が生成する多くのプロンプトは、構造が明示されていない一段落の文章であり、改訂作業が容易ではない。よって筆者は、当初のようにプロンプトを複数のユニットに分けて構造化する形式に戻し、かつ Markdown 記法で表記するようにした。主要ユニットを“#”、ユニットの中の項目を“-”で表記した。さらに下位の階層が必要な場合には“##”を用いてサブユニットを設定したが、プロンプトの過度な複雑化を防ぐため、それ以上の下位階層は設けないようにした。

開発したプロンプトは、A) 入門・汎用型、B) 流暢性育成型、C) 役割・場面对応型、D) 生活密着型、E) 知識重視型の5つの種類に分類できる。

A) 入門・汎用型プロンプト

A1) English Conversation Tutor (Tutor) : Tutor は、汎用性を重視し、これ単体でたいの AI 英会話ができるように設計された。AI は、共感的で忍耐強く、常に肯定的な反応を示す英会話教師として振る舞う。学習者のぎこちない表現を自然な英語に修正する機能、継続的な発話を促す機能を備えている。会話終了時には、学習者への助言、10 の重要表現、学習者視点での会話要約を提示する。2023 年 4 月の公開以降、Ver. 3 まで継続的な改訂を実施し、学生からのフィードバックを通じて、苦勞しながら英語を話す学習者への感情的サポートの要素を強化した。

A2) Friendly English Coach (Friendly) : Friendly は、英会話に苦手意識を持つ学習者を対象とし、CEFR⁹ の A1-A2 レベルの学習者との対話を想定したプロンプトである。学習者にストレスを与えることなく発話を促進し、小さな成功も積極的に評価しながら言語表現の改善を行う。なお、Friendly の Ver. 1 は 2025 年 2 月にまず筆者の SNS (Facebook) で限定的に公開したが、すぐに不登校の中学生在が本プロンプトを用いて英会話学習に取り組み、その成果に驚いた保護者も同様にこのプロンプトを活用したという報告を受けた。

B) 流暢性育成型プロンプト

B1) Debating Partner (Debate) : Debate は、ディベートの基本構造を活かし、1 つの命題についての継続的な学習者の発話を促進する。AI は学習者の習熟度に応じたレベルの英語を使い、意見の確認という形式で学習者の表現をより自然な英語に修正する。

B2) Ask Me Questions (Questions) : Questions は、日本人英語学習者が苦手とする質問技術の向上のために作成された。AI は留学生として振る舞い、学習者が行う質問に答え続けるが、AI から学習者に質問をすることはない。

C) 役割・場面对応型プロンプト

C1) Role-play Conversation (Role) : Role は、学習者が指定する具体的な役割・場面での現実世界のシミュレーションを提供する。実例としてはホテルやレストランでの接客などの現実的な設定が多かった。

C2) Speech Refinement Advisor (Speech) : Speech は、各種英語資格試験のスピーチ対策に特化したプロンプトで、AI は学習者が提供したスピーチに対して、語彙・文法・発話・トピック展開の4つの観点から助言を提供する。助言は学習者が最初に指定する CEFR レベルに即して与えられる。

D) 生活密着型プロンプト¹⁰

D1) Positive Life Coach (Life) : Life は、英会話練習における相手・話題・時間の不足を同時に解消することを目的として開発された。AI は、学習者に一日の出来事を語らせ、その日に起こった3つの良いことを特定するよう促す。学習者が特定に困ると AI は水平思考一固定観念に囚われない多角的な視点からの発想一で思いがけない発想を提供する。このプロンプトによって、学習者は英語スピーキング練習と一日の肯定的総括を同時に実現する。

E) 知識活用型プロンプト

E1) Oral Examiner (Examiner) : Examiner は、「日常英会話より、専門分野についての話の方が簡単だ」と述べる学習者のために作成された。学習者が英語文章を入力した後、AI がその内容に関する10の質問を提示し、学習者が回答する。学習者回答が不正解の場合、AI は、大規模言語モデル (Large Language Model: LLM) の柔軟な対応力を活かし、正解を示さずにヒントを出し続ける。

E2) Socratic tutor (Socratic) : Socratic は、学習者が熟知している内容について、AI が深い問いを投げかける。Examiner より高度な英語表現力を要するプロンプトである。

2.2.4 会話表現リストの段階的开发

多くの学習者が、セメスターが進行するにつれ、頻出表現は事前に暗記しておくことが英会話では重要であると述べた。このフィードバックを受け、筆者はAIを活用して、以下の表現リストを補助教材として順次開発・提供した。なおこれら12のリストを本報告に掲載するのは紙幅の関係で事実上不可能であるので、これらはダウンロードできるようにしている (付録D)。これも筆者は著作権を放棄しているので希望者は自由に使うことができる。

A) 基礎的表現 (第2-3週) : 第2週には以前に京都大学での国際交流企画 (International Networking Meeting: INM)¹¹ のために作成していた Conversation Expressions を提示し、第3週にはその簡略版である Expressing Your Thoughts と Communication Strategies を提供した。後者は、学習者が、直面している課題に対して十分な英語力がない場合の対処法を示したものである。

B) 実用的表現 (第4週) : Informal Expressions と Small Talk Expressions で、気軽な会話での表現を提供した。同時に、INM とは別の国際交流企画である Kyoto Summer Program¹² の参加者のために作成した、Expressions for Presentations, Expressions for Q&A Sessions, Expressions for Managing Discussion and Debate, Expressions for Chairpersons も提供した。これらの提示により Kyoto Summer Program への関心を高めることも狙った。

C) 会話継続のための表現 (第5週・第7週) : 第5週には Hesitation Devices を提示し、自然な発話における間の取り方や思考時間確保のための表現をまとめた。第7週には Active Listening Expressions を提供し、相手の快適な発話を促進するための表現を提示した。

D) 感情を豊かに表す表現 (第11週) : 第11週には Emotional Expressions を提示し、自然で効果的なコミュニケーションに不可欠な感情の表現方法をまとめた。

これらの表現リストの迅速な作成は、AI 利用によって可能になった。これらのリストは、学生の具体的なニーズを把握し、AI で多様な表現例原案を生成し、最終的に筆者が編集し教育的適切性を確保するという3段階のプロセスで、学生の要望が出た次の週に提示された。

3. 結果

この章では、アンケート調査、および毎週の AI 英会話報告書（合計 226 篇）に記載されたコメントから得られた学習者の AI 英会話活動の実態を報告し、若干の考察を加える。

3.1 アンケート調査

3.1.1 調査方法

ここで報告する 2 つの匿名アンケートの 1 つ目は、第 12 週の授業中の約 5 分間の調査時間で Active Listening I の受講者が回答したものである。設問は、5 件法による 19 問の質問項目と任意回答による自由記述 4 問から構成されている。5 件法による質問項目の内訳は、AI 英会話に関する 8 問、リスニングに関する 6 問、YouTube の解説動画に関する 5 問であるが、本報告では、AI 会話に関する調査結果のみを取り上げる。回答者数は 19 名であり、これはセメスター最終週まで履修を継続した学生全員による回答である。もう 1 つの匿名アンケートは、続く第 13 週に追加の質問項目 1 問（5 件法）について授業中の 1 分間足らずで回答を求めたものである。この追加調査の回答者数は 14 名であった。

これらの調査は匿名形式で実施したものの、調査時点においてまだ授業が 2 ～ 3 回残っていたので、学習者の回答には肯定的バイアスが含まれている可能性がある。一方、国際高等教育院が実施する別の授業アンケートは第 14 週に実施された。この国際高等教育院のデータ処理には科目担当教員が関与せず、教員へのデータ開示は実施から 2 か月以上経過後に行われる。しかし、当該データは本報告の締切に間に合わないため、紀要編集委員会の許可を得た上で初稿校正時に付録に追加報告することとする（付録 E）。

3.1.2 5 件法アンケート結果

表 1 は、これら 2 回のアンケートのすべての設問についての記述統計値を示している。設問は、示された事項に対する同意の程度を 5 件法で示すものであった（5：そう思う、4：どちらかと言えばそう思う、3：どちらとも言えない、2：どちらかと言えばそう思わない、1：そう思わない）。

すべての回答が肯定的（5 と 4）あるいは中立的（3）であり、否定的な回答（2 と 1）は一切見

表 1 AI 英会話およびその関連活動の意義

番号	設問	データ個数	平均値	標準偏差	最大値	最小値	中央値
1	AI との英会話は英語力向上に役立った	14	4.8	0.43	5	4	5
2	AI 会話報告書の意義	19	4.8	0.42	5	4	5
3	AI 会話報告書英語執筆の意義	19	4.9	0.23	5	4	5
4	AI 会話報告書の教室内共有の意義	19	4.6	0.68	5	3	5
5	AI 会話報告書の英語での教室内共有の意義	19	4.6	0.76	5	3	5
6	標語つきのスライドの意義	19	4.4	0.69	5	3	5
7	複数 AI プロンプトを自由選択できる意義	19	5.0	0.00	5	5	5
8	クラスメートとの 10 分間英会話の意義	19	4.8	0.54	5	3	5
9	会話相手のランダム決定の意義	19	4.8	0.63	5	3	5

られなかった。各項目の平均値、中央値、標準偏差、最大値、最小値を見るならば、肯定的バイアスの可能性を勘案したとしても、本実践は成功を収めたものと判断できるだろう。

特に設問の1～3は本実践の評価において中核的な位置を占めるものであるが、いずれもきわめて高い評価（平均点4.8～4.9点）を得ることができた。一方、これらと比較してやや数値が劣る傾向を示したのが、教師主導の活動に関する設問の4～6である。これらの項目でも十分に成功したと評価できる水準（平均点4.4～4.6点）にあるが、実践者としては今後の改善点として、解説時間の短縮および解説時の英語発話速度をより緩やかにすることを検討したい。

設問7については、全回答者が5の完全同意を示すという特筆すべき結果が得られた。詳しい報告は省くが、リスニング課題における動画選択についても、学習者の自由を常に認めたことの意義に対してすべて5の評価が得られた。スピーキングとリスニングの内容選択を完全に学生に任せるたことに関するこれらの結果は、学生が学びの自由を強く求めていることを示唆している。

設問の8と9は英語学習者同士による英会話活動を対象としたものであったが、これらも設問1と同程度の高い数値（平均点4.8点）を示した。一般的に学習者は、英語母語話者などの上級話者との会話を好む傾向があるとされているが、AI英会話を他の活動と連動させた本実践においては、学習者は自身と同程度の英語力の相手との会話活動に対しても高い意義を見出した。

3.1.3 自由記述回答の結果

「この授業で来期も続けるもしくは拡充すべき課題や活動」および「その他」の自由記述においては、5件法の定量的設問では捉えきれない学習者の具体的な意見や感想が得られた。AI会話については、「どこでも一人で、しかも気兼ねなく何でも話せる」練習方法として英語を話すことの習慣化が実現できたとの報告や、本実践で行われたAIの使い方が、「苦手意識を減らすための『正しいAIの使い方』」であり、「いきなり留学生グループに一人で話に行く前段階の練習として最適」との評価が得られた。

学習環境の心理的安全性に関しては、本授業の「安心して授業を受けながら、他の生徒の学習内容を知ったり会話したりすることでモチベーションが高まる場」としての機能や、シラバスに「失敗してもよい」と明記されていたことが履修選択の決定要因となったとの言及があった。学習の継続については、授業課題という強制的な枠組みが学習者の成長に寄与したとする回答があり、自主学習の継続のためには、ある程度の強制を課すことが現実的であることを示唆している。今後の学習継続についても「先生の作成されたプロンプトや教えていただいた動画で、楽しく勉強を続けていきたい」との記述が見られ、本実践が学習者の内発的動機を高めたことを示唆している。

授業に「新たに加えるべき課題や活動」に関する提案としては、学習者の諸活動を包括的に扱えるAIプロンプトの要望があった。否定的なコメントとしては、最初の授業でのより丁寧なAIの技術的マニュアルの提示を求める声があった。

3.2 毎週のAI英会話報告書コメントの結果

3.2.1 調査方法

本授業の受講者が13週間にわたって提出したAI英会話報告書は、以下の7項目から構成された：(1) コメントの教室内匿名共有の承諾確認、(2) 利用したプロンプトの申告、(3) AIとの英会話実施時間の自己申告、(4) AIとの英会話内容の要約（AIが作成した記録をコピー）、(5) AI会話から学ぶべきと思った表現リストとコメント、(6) 自由記述形式のコメント（本実践報告の中核的データ）、(7) 報告書の作成法（AI利用の有無）の申告¹³。

提出された合計 226 篇の報告書にあった上記 7 項目はすべてエクセルファイルに転記し、質的分析の準備資料とした。コメントは内容の種類に応じて分割し、分析用のタグを付与した。タグ付与の主たる目的は、週ごとの分析および学生類型ごとの分析のための予備の整理である。なお、この AI 英会話報告書は評価の一環として提出されたものであるため、肯定的なコメントが多くなる可能性があることを分析者として認識した。

なお、週ごとの AI 英会話報告書は筆者がそれぞれ 10 点満点で採点した。評価の観点は、学習者それぞれが自律的に学習し、その成果を具体的に報告しているかであった。よって、AI 英会話時間が少ない者も、自分なりの学習を充実させていることが伺えたら高得点を与えた。得点の意味づけは 8 点を十分良い学び、9 点を特に良い学び、10 点を格段に優れている学びとした。それ以下の 7 点はもう少し努力が望まれる、6 点は合格水準には達していると意味づけて学習者に伝えた。当初は整数点だけを与える予定だったが、途中から学習者を励ます意味もあり、7.5 点、8.5 点、9.5 点という中間点も設けた。学習者が得た得点全体の平均点は 8.6 点、標準偏差は 0.8、最大値は 10 点、最小値は 6 点、中央値は 8.5 点であった。得点分布は図 1 のとおりである。「十分に良い」と「特に良い」の 8 点と 9 点が多く、さらにそれらの評価を、それぞれの次の段階である「特に良い」と「格段に優れている」に導くための 8.5 点や 9.5 点もそれなりの数がある。相対評価の基準からすれば「甘すぎる」評価点ではあるが、筆者は学習者を肯定的に評価することを優先した。

3.3 週ごとの分析

各週において学習者が自己申告した AI との英会話時間（単位は分）は表 2 にまとめている。

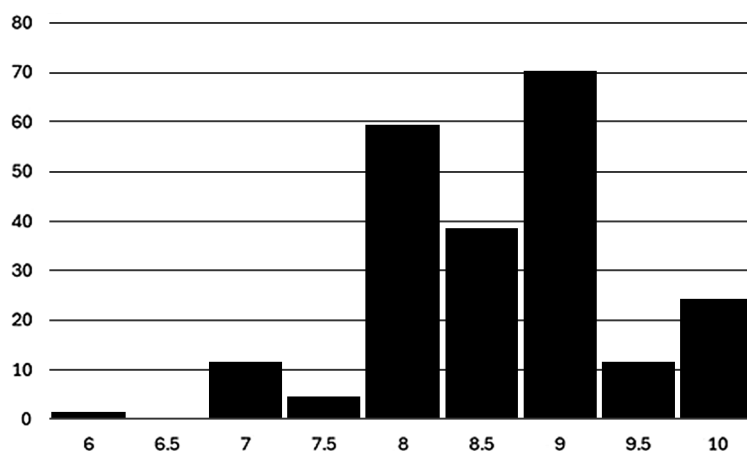
全 13 週間の学習期間は、学習者の心理状態と学習行動の特徴に基づいて、初動期（第 1～3 週）、向上期（第 4～5 週）、安定期（第 6～8 週）、発展期（第 9～13 週）の 4 期に分類することができる。以下週ごとに目立ったコメントを引用しながら報告する。

A) 初動期（第 1～3 週）：AI の肯定的受容とスピーキング力向上への兆し：初動期においては、学習者が AI 会話システムに対して肯定的な受容姿勢を示し、スピーキング力向上の初期的兆候が観察された。第 1 週では、9 件の AI 高評価コメントが記録され、学習開始前に抱いていた懸念（AI 相手の会話は面白くない・難しいといった不安）がすぐに解消されたことが伺えた。学習者からは「新鮮だ」「今後も続けたい」といった前向きなコメントも得られた。第 2 週には、発話文の長さ、発話までの時間、発話の種類といった複数の指標において、スピーキングが向上したというコメントが 4 件観察された。第 3 週では、ユーザー意識の高まりが 4 件確認され、カフェ、万博、レストラン、将来の旅行など学習者が実際の使用場面を具体的に意識して AI 英会話をし始めたことがわかった。

B) 向上期（第 4～5 週）：スピーキング時間の急激な増加と会話活動への自覚：向上期は、量的・質的な変化が最も顕著に現れた期間である。AI との英会話時間が大きく上昇し、同時に会話活動に対する学習者の自覚も高まった。第 4 週では、自らの英語発話に関する観察・改善対策・全般的な自信の 3 要素が一気に増加した。他の学習者の実践例を参考に新しいプロンプトを使う、あるいは復習の音読を 3 回行うルーティーンを確立したいといった具体的な学習計画も示された。第 5 週においては、AI 英会話に関する、自己観察・改善対策・全般的な自信だけでなく、意欲を示す言及も目立ち始めた。

C) 安定期（第 6～8 週）：中だるみ現象と内省の深化：5 月末からの第 6～8 週は、セメスター中盤の時期的要因も影響してか、AI 英会話時間が減少する中だるみの現象が観察された。しかし

図1 毎週のAI英会話報告書の得点分布



注：X軸は点数を、Y軸は度数を示す。

表2 AI英会話の時間（自己申告にもとづく概算¹⁴⁾）

	データ個数	平均値	標準偏差	最大値	最小値	中央値
第1週	17	17.2	13.5	50	1	15.0
第2週	18	20.2	16.1	70	2	15.0
第3週	19	26.2	33.2	150	2	15.0
第4週	17	37.8	46.7	150	2	20.0
第5週	17	37.1	44.0	150	2	25.0
第6週	19	33.1	36.0	150	2	20.0
第7週	18	29.8	32.9	150	2	20.0
第8週	17	32.6	33.8	150	5	20.0
第9週	16	36.0	37.3	150	10	25.0
第10週	18	39.1	47.5	180	10	25.0
第11週	18	28.3	31.6	150	10	20.0
第12週	14	33.6	34.6	150	10	25.5
第13週	14	34.0	36.0	150	10	25.0

注：第11週の平均値の減少は、長時間のAI英会話を続けていた学習者1名が、特定の事情により30分の会話に留まった影響が大きい。

ながら、学習活動自体は安定化し、むしろ内省の広がりや深まり、さらには具体的行動への展開が確認された。第6週では、「やる気が出なかったが、やってみるとよかった」という内省的コメントが記録された。Life プロンプトでは、その日の出来事だけでなくその際の思考や感情についてもできるだけ語るという質的向上が見られた。また、発話を詳細にすればそれだけ苦勞するが、他方AIからのフィードバックからの学びが増えたという報告もあった。第7週においては、AIフィードバックを復習することの重要性を認識するコメントが見られた。自らの英語発話に対する観察力も向上し、トピックへの習熟度と自分の英語の流暢性の相関についての分析が見られた。冠詞と時

制を自分の文法上の問題として指摘するコメントもあった。第8週では、「AIと対等に話をしている感覚」の獲得や、日常での独り言を英語で行い始めるといった行動変容が報告された。また自分の英語が本学の国際交流企画のINMで褒められた嬉しい驚きも報告された。

D) 発展期（第9～13週）：課題意識の高度化と会話能力の深化：発展期前半の2週間では、AI会話の時間が回復したが、その後試験期間が近づいたセメスター最後の3週間で若干減少した。この発展期では、自らの課題と挑戦についての自覚、会話能力の深化、ユーザー意識のさらなる高まりなどが特徴的であった。第9週では、会話の流暢性の向上に飽き足らず、自らの表現レパートリーを増やす欲求が示された。第10週では、自分の専門分野についての高度な話を始める学生も出てきた。また、自分が、普段視聴するドラマの登場人物のような話し方をしていることへの気づきや、映像情報を使わないAIとの英会話においては不要なはずの、声の大きさの増加、前のめりの姿勢、手を使った表現といった非言語コミュニケーションを活用している報告もあった。第11週では、自己の発話パターン（理由を先に述べてからsoで主張する構造）への批判的な気づきなどがあった。INMなどでの実際の対人コミュニケーションとAI英会話の間のギャップを指摘し、それを自らの課題とするコメントも見られた。学習者は、AI英会話と現実の英会話の違いを自覚し、前者を後者のための準備練習とみなしていた。第12週では、複数週にわたるRoleプロンプトの使用により「世界各地を旅行しているような感覚」を得ているという報告があった。また、AIが学習者の発話を聞き違えたにもかかわらず、会話が成立したことを会話記録から発見し、日常会話の本質に対する省察を深めた事例もあった。第13週では、正直な感情を込めた発話や、不平を明確にことばにすることなどの重要性を述べるコメントがあり、AIとの英会話と現実世界の英会話のギャップが狭まりつつあるような印象が得られた。同時にINMでの会話スキル向上を目指したいといった学習の継続的発展への意欲も示された。

利用したプロンプトについては、複数のプロンプト利用を認めたので、226編の報告書において、269個のプロンプト使用が報告された。最高使用頻度を記録したのはTutor（62回）とLife（61回）であった。汎用型プロンプトであるTutorの高い使用頻度は当然のことであろうが、Lifeの高使用頻度は、英会話練習と毎日の肯定的内省活動を統合した複合的機能が学習者に受け入れられていることを示している。第二位グループは、最上位グループの約半数の使用頻度を示した、Friendly（32回）、Questions（30回）、Role（30回）、Voice（28回）である。第三位としては第二位グループの約半数の使用頻度でDebate（16回）が位置した。低使用頻度グループには、Speech（5回）とExaminer（4回）があり、それにSocrates（1回）が続いた。9個のプロンプトのうち、使われなかったものはなかった。

3.4 学習者類型ごとの分析

本報告では、平均値による分析では捨象されがちな学習者個々の特徴を捉えるため、類型的な分析を通じて、より多面的な学習過程を描き出すことを試みた。筆者は、収集したエクセルデータを慎重に検討した結果、4つの学習者類型を設定し、1つの類型ごとに2名ずつの学生を選定した。設定した4つの類型は、第1週において10分以下しかAI英会話を行えなかったunder-10-minute learners（U10 Learners）、同様に20分以下しかAI英会話を継続できなかったunder-20-minute learners（U20 Learners）、第1週から30分以上のAI英会話を実現したover-30-minute users（O30 Users）、そしてセメスター途中からAI英会話を日常化したSustained Usersである。以下の記述はすべてエクセルデータに基づくものである。

A) U10 Learners : 学習者 A と学習者 B の学習過程

学習者 A は第 1 週の AI 英会話は 3 分間しか続かなかったが、そもそも学習者 A は日本語においても他人との会話を苦手としていた。学習者 A は、第 1 週では AI との対話の前に話題を考えておくなどの工夫を施していた。第 2 週の 2 分間の会話では、AI の英語を聞きながら次の話題を考案することの困難さに苦しんだ。それでも第 5 週では 10 分を超過したことに達成感を覚え、日本語での会話行動にも変化が生じたと報告している。しかし、学習者 A はこの時点までずっと学習者支援機能がない Voice モードで AI 英会話をしていた。学習者 A は第 7 週において初めて学習支援機能を備えるプロンプト (Life) で英会話をを行い、自然な英語への言い換え機能に助けられることを実感した。この週では、会話時間が 15 分間に伸びただけでなく、会話の質的向上にも喜びを示していた。学習者 A はその後 4 週間にわたって Life を使用し、肯定的なコメントを書き続けた。だが、学習者 A は第 11 週からの最終 3 週間はハンズフリーの Voice モードに戻った。学習者 A は、第 10 週の Life 使用時に 27 分間の対話を実現したが、30 分間を超える対話を目標として設定し続け、第 13 週にそれを達成したことに誇りをもった。

学習者 B は第 1 週に 5 分間の AI 英会話をを行い、第 3 週の 7 分間の AI 英会話において流暢性の観点で進歩を認識した。第 4 週以降、会話時間は 10 分間で一定であったが、発話の長さ、意図伝達の正確性、発話の途切れの解消などの観点で、毎週スピーキング力の向上感を報告し続けた。第 10 週では、Life の使用を通じて英語で自らの言動を振り返ることが人格的成長に寄与するとも述べた。

B) U20 Learners : 学習者 C ・ 学習者 D の学習展開

学習者 C は第 1-2 週において 15 分間の対話を行ったが、第 3 週から 30 分間、時として 40 分間に及ぶ対話を実現した。最初の 2 週間でいきなり Questions を使うなど、学習者 C は自分の英語力向上に自覚的であったことがうかがえる。学習者 C は、第 3 週に標準的な Tutor を初めて利用し、AI による即座の自然な英語への言い換えの効果を実感した。その後、学習者 C は、同様に言い換え機能に優れる Life を使用したが、第 5 週から第 7 週まで Debate に挑戦した。第 5 週のディベートは自身の知識が限定的な話題を論題として設定したこともあり十分な成果を得られなかったが、第 6 週では熟知している話題で十分にディベートを楽しみ、第 7 週では AI を論駁して、AI からの驚嘆の反応 “huh” を引き出したことに満足を示した。その後、Tutor、Life、Questions のプロンプトを使用し、第 12 週と第 13 週で再度 Debate に取り組んだ。最終的には、ディベートをはじめとする AI 英会話を、専門の勉強からの気分転換も兼ねて今後も継続して使いたいと表明している。

学習者 D は、20 分を超過した AI 英会話を行ったのは第 11 週と第 12 週のみであった。しかし、第 2 週から AI による自然な英語への言い換えの重要性を自覚し、音読復習を開始した。第 4 週には、日本語から翻訳するのではなく、英語で考えて質問することへの自信を深め、翌週からの Debate 挑戦を表明した。第 5 週のディベートにおいて、学習者 D は AI の反論から多様な視点を獲得できることに喜びを示し、さらには AI 反論の矛盾を指摘して AI ディベートを楽しんだ。第 6 週のディベートでは前週の反省に基づき、議論中の具体例を充実させたものの、自らの英文が長く、構造が複雑になりすぎていることに改善の余地があることを自覚した。第 8 週と第 10 週の Questions 使用時には、単純な質問を連続するのではなく、まず相手の回答に共感的反応を示すべきであることなど、ユーザー意識の向上を示した。第 11 週では夏季休暇に予定している旅行について AI と相談したことが意義深かったと報告し、第 12 週では AI との会話がとにかく楽しく、セメスター終了後も週 2-3 回は AI 英会話を継続したいと意欲を表明した。

C) O30 Users：学習者 E・学習者 F の学習特性

学習者 E はセメスターの初期に 50 分、70 分、60 分、80 分と長時間の AI 英会話を実現したが、その後の時間は 20 ～ 30 分間に安定した。この学習者 E は第 1 週から、もっとも重要であることは AI 英会話を楽しんで行うことだと述べていた。第 2-4 週において発話量、流暢性、発音の明瞭性等の観点で自身のスピーキング力向上を認識していた。第 7-8 週では Voice 機能を使用し、AI と自身の万博（2025 年大阪・関西万博）のバン格拉デシュ館体験について語り、ごく簡単なベンガル語会話を AI と楽しんだ。第 11 週では、自分の悩みについて AI に語った際、AI は人間ではないにもかかわらず自分の心が晴れたことなどを述べ、学習者 E の AI 英会話が単純な英語学習を越え始めていることが示唆された。第 12 週ではテスト終了後も AI 会話を継続したい意向を示した。第 13 週ではセメスターを振り返り、小さな進歩の喜びが学習の推進力（driving force）であったと総括した上で、自分の周囲にいる英語話者（留学生）への積極的な話しかけによる支援意欲を表明した。

学習者 F は最初の週で 35 分間、以後 25 ～ 40 分間の対話を継続した。第 2 週から、自らの英語発話の文法的正確性にはある程度の自信を示し、何も考えずに発話できるフレーズを増やすことと、新しい文を発する際には発話までの時間を短縮することを課題として設定した。第 3 週、第 5 週、第 11 週で学習者 F は、AI 英会話が自らが訪れる英語カフェでの英語使用により影響を与えていると述べた。しかし同時に、自ら創造的に英文を構築した場合には簡単な語彙しか使用していないことを反省していた。第 13 週では言語表現はコミュニケーションのためであり、人間関係構築のためのポライトネスを重視すること、発せられたことばには何らかの返答を示すこと、感謝表現を欠かさないことなどの重要性を自らに言い聞かせていた。

D) Sustained Users：学習者 G・学習者 H の継続的英語使用

学習者 G の AI 英会話時間は、第 1-2 週に 30 分間であったが、第 2 週では、Life による毎日の言動の肯定的振り返りに促されて、物事に飽きやすい自分が AI 会話を継続していることに自分でも驚いていると述べた。第 3 週では AI 会話が歯磨きと同様に、実行しないと不快感を覚えるような日常習慣になったと語り、この週から、毎日 20 ～ 40 分間（1 週間あたり 150 分換算）の AI 英会話を継続した。また学習者 G は、クラス内で最も豊富な社会経験を有しており、AI 会話と実際の英会話の差異もよく自覚していた。第 5 週では、1 日の終わりの振り返りのみならず、朝にその日の予定について AI と対話して毎日を過ごすようになった。第 7 週では自分が長いセンテンスで発話できることを自覚しつつも、発話の瞬発性において課題が残るとした。また復習音読が「信じられないほど有効である」とも述べていた。第 10 週では、高度で複雑な話題について語りたい際には、まず日本語で文章を作成し、それを AI に翻訳させ、それを少しずつ参照しながら英語を話すストラテジーも提示していた。第 12 週では、英語動画視聴や AI 英会話は、専門の勉強に疲れた時に行い、英語が気分転換となっていると述べた。第 13 週では自然な情感を込めた英語表現を自分はまだまだ習得していないと自らの課題の 1 つを示した。

学習者 H は最初の 3 週間で、1 週間で 30 ～ 40 分間の AI 英会話を行った。第 4 ～ 5 週は毎日 30 分程度（1 週間で 150 分に換算）の会話を申告し、その後も第 6 ～ 9 週に毎日 20 分程度（1 週間で 100 分換算）、第 10 週は 1 回で連続 180 分間の対話を実現した。その後は 1 週間あたり 50 ～ 60 分間の AI 英会話が続いたが、期末試験が近づいた最後の 3 週間は 1 週間あたり 20 ～ 40 分間に減少した。学習者 H の会話時間が増加したきっかけは第 3 週の Life 使用であり、これにより学習者 H は、1 日を肯定的に振り返ることができることの心地よさに気づいた。さらに学習者 H は、

第4週にAIが言い換えてくれる表現が自身の表現力を拡張してくれることの効果を認識し、第5週には発音の正確性向上を自らの課題として認めた。学習者Hは、第7週以降はQuestionsを2回、Tutorを5回使用しているが、第9週ではパソコン画面の左半分に有用英語表現リストを表示し、右側でAIとの英会話を行う工夫を紹介した。特筆すべきは第10週で、この時の学習者Hはある深い話題について友人と日本語で長時間語り合った後、そのテーマについてより深く考察したいと思い、AIと英語で会話した。この会話は、既成の頻出表現を多用するようなものではなく、思考と言語表現が一体化した創造的な英語使用であった。学習者Hにとってこのような体験は初めてであったが、学習者Hはこれを楽しみ、自分で予定していたよりもはるかに長時間（3時間）のAIとの英語での会話となった。学習者Hは、英語で考えながらしゃべることが自分にとって自然になってきたようであると述べた。

4. 考察

以上の結果を受けて、本実践報告は4点について考察する。

4.1 自由と強制のバランス

本実践において、AI英会話を最大10%の特別加点として自発的参加を推奨した場合、必修科目（Writing-Listening）では10%程度、選択科目（Active Listening）でも25～30%程度の学生しか課題を提出しなかった。しかし、2024年度にActive ListeningでAI英会話を正式な評価対象（配点10%）に含めた結果、計算上は従来の特別加点と同じ割合の配点にも関わらず、ほとんどの受講生が毎週報告書を提出するようになった。この結果は、多くの学習者にとって学習機会の提供だけでは不十分であり、継続的な学習には何らかの強制的な枠組みが必要であるかもしれないことを示唆している。

ただし、ここでの「強制」は、学習者がシラバスで確認した上で自ら課すことを決意した選択的な強制である。カリキュラム改革において学習の「強制」が議論される際、学習者が自らが自発的に課す強制と、選択の余地がない強制を混同してはならない。また、学習者の自主性については、英会話プロンプトの選択と英語動画の選択を完全に学習者の自由に委ねたことに対して、全員が5件法で最高評価の5を選択したことにも注目すべきだろう。このような完全同意は他の設問では見られなかった現象であり、学びの自由、あるいは自律性は、学習にとってきわめて重要であると思われる。

本実践の学習者は、シラバスで事前予告され授業で示された単位取得のための毎週の課題を、自らに課すことを選択した。だが本実践の強制的な側面は毎週の課題提出という形式だけであり、それぞれの課題で、自分が何を・どのように・どの程度まで・どのくらいの時間をかけて学ぶかは自らが決定する自己調整型学習を行った。その学習に対する教師の評価も、図1に示された通り、学習者を成績で序列化するものではなく、学習者を励ますものであった。本実践は、授業という枠組み内での最低レベルの強制で、学習者の自律的な学びを最大限に支援するものだったとまとめられるかもしれない。

4.2 AIプロンプトが尊重した学習者のニーズと自由な探究

AIプロンプトの開発と改訂のアイデアの多くは、学習者のAI会話報告書の読み込み、授業中の

学習者観察（特にクラスメートとの英会話場面）、授業内外での積極的な雑談を通じた学習者の正直な思いの聞き取りから得られた。また、開発・改訂の度に筆者自身が繰り返しプロンプトを使用し、細かな改良を重ねた。市販 AI アプリではなく独自の AI プロンプトを開発することの優位点の1つは、学習者のニーズに即した徹底的な現場対応が可能なことである。このような開発経験を重ねることで、筆者はユーザー・イノベーション—AI を使いながら AI の賢明な利用法を発見すること—のコツを少しずつ身につけてきたと感じている。

筆者はそうのように現場主義を重視しながら、カリキュラムで定められた構文を基盤とする AI アプリではなく、学習者が自由に選択する会話内容を基盤とする内容中心のプロンプトを使用した。これらのプロンプトには、AI がメッセージ確認の形で学習者の英語を自然な表現に改訂する言い換え機能と、会話内容を学習者視点でまとめた要約機能を組み込んだ。またそもそも推奨した AI 操作方法がクリック制御方式であり、学習者は自分が英語を話す際の方法（即時発話か時間をかけての発話、完全即興かメモを見ながらの発話など）、および AI の英語の聞き方（聴取回数や活字読解の有無）も自分で決めることができた。多くの英語教師が推奨しない、ゆっくり考えてからの発話やメモを参照しながらの発話を行っても一切の否定的評価は与えられなかった。学習者は自らがもっとも良いと思う内容と方法で AI と英会話した。

このように学習支援機能を備えたプロンプトを自由に使った AI 英会話で、学習者は自らの想いをどう英語で表現するかという小実験を繰り返したと言える。学習者は、小実験ごとに否定的評価抜きの AI フィードバックを得た。さらには学習者を「I」とした英語要約を復習したり音読したりして、学習者は総括的な AI フィードバックを得た。その上で学習者は、次の週に新たに英会話の話題と課題を自己決定した。つまり、学習者は会話のターンごとに、そして毎週の英会話ごとに、学習のあり方を自己調整する自由な探究学習を展開したともいえるだろう。こういった自律的な学びは、システムに監視されながら定められた学習を毎週予定通りに行うといった管理学習とは根本的に異なる。本実践の「AI 英会話」は、他律的な強制学習とは異なる、自律的で探究的な学びである。

4.3 AI 英会話高評価の背景要因

学習者による「AI 英会話が英語力向上に役立った」という評価は、5 点満点で平均 4.8 点（すべて 5 または 4 の肯定的評価）であった。しかし、この高評価を AI 英会話活動単体への評価と捉えるのは早計であろう。本実践では、会話内容とプロンプトの自由選択、英語による報告書作成、学習促進標語つきスライドでのコメント共有、ランダムに選ばれたクラスメートとの 10 分間英会話など、AI 英会話と連動する複数の活動—学習者が平均 4.6 ～ 5 点の高評価を示した諸活動—を統合的に実施した。

さらに筆者は、教室を「学習者が安心して間違い、その間違いから学ぶ場所」とであると宣言し、その方針でのクラス運営を貫いた。筆者は、学習者の要望に応じて、有用な英語表現リストを AI を使って迅速に作成し配布するなどの学習支援を続けた。今回の AI 英会話への高評価は、これらの活動が連動的に行われた結果と理解すべきであろう。AI 英会話の導入が単独でスピーキング能力向上に直結したといった短絡的な結論へと一般化することは避けるべきだ。量的研究およびそれらの体系的レビューやメタ分析では、しばしば「AI 英会話はスピーキング能力を向上させる」といった単純な因果性をもつ一義的な結論を出すことを示す。しかし同じ教材と方法で教えても、クラスごとにセメスターごとに異なる教育的成果を得ることが多い実践者の一人として筆者は、教育と

いった文脈依存的で複合的な営みを単純化させることに警戒心を有している。実践者として大切なことは、一見同じように思える状況に多様性を見出しその多種の違いに的確に対応することだと筆者は考えている。

4.4 質的記述の意義

本実践報告は、あるクラスのセメスターの学びの様子を、1～2回のテスト測定の前平均点に還元することなく、毎週の変化、学習者個人間の違い、学習者個人内の変化などでの多面的な記述を行った。セメスターの学習過程は、初動期・向上期・安定期・発展期の4期に分けたが、これは、これまでのActive ListeningとWriting-Listeningでの予備的試行で筆者が得ていた印象（「英語力の向上が見られるまでには約5週間、学習の深化と定着には約10週間が必要」）とも一致していた。この知見は、仮に8週で1学期とするクォーター制を導入した場合、学習習慣が定着する前に授業期間が終了する可能性があることを示唆しており、カリキュラム設計において重要な検討事項となる。

筆者は、学習者を4つの類型に分け、各類型から2名を選んで個性を記述した。第1週のAI英会話時間が10分以下のU10 Learners（2名）は質的・量的に着実な進歩を示し、20分以下のU20 Learners（2名）は自分の英語の改善すべき点に自覚的で、プロンプトの使い分けも意識的であった。初回から30分以上会話したO30 Users（2名）は現実世界での英語使用への意識が高く、途中から週150分以上利用したSustained Users（2名）はAI英会話を日常生活の振り返りや思考活動の一部として取り込んでいた。学習者は各自の英語力レベルに応じて学習課題を自ら設定し、一定以上の英語力を持つ者は英語学習を教室外の英語使用に結びつけたり、日常生活の一部としたりする傾向が見られた。筆者は授業の狙いを「他律的な英語学習者から自律的な英語ユーザーへと成長を遂げること」としていたが、この目標は学習者それぞれに応じてある程度達成されたのではないかと筆者は考えている。

セメスターを通じての学習効果を、クラス全員の平均点のみで測定する研究では、セメスター内・学習者個人間・個人内の違いが軽視されがちである。しかし個人間・個人内の違いを具体的なエピソードを通じて見ることに意義がある。比喩的表現を使うなら¹⁵、クラスはそれぞれの学習者がそれぞれのメロディーを奏でている多声的な時空である。教師の役割は、多声音楽（ポリフォニー）の指揮者のように、すべてのメロディーを聞き取った上で、それらの異なる響きを活かせるように授業の流れという音楽を作り出すことである¹⁶。少人数クラスで技能獲得を支援する実践者にとっては、週を重ねるにつれて変化するクラスの様子を理解し、学習者間の違いを踏まえた上で、一人ひとりの変化や差異に敏感に反応することが重要である。本報告のような観察・記述・反省を通じて実践者が力量を向上させ、より効果的な教育実践を展開することを筆者は期待したい。

5. 結語

本実践では、学習者が選択科目において、AIとの英会話（内容とプロンプト）を自由に決定し、毎週AI英会話を行い、教師はその学習者の経験を授業活動や補助資料と連動させた。その結果、学習者が高い満足度を示したことが、アンケートの5件法設問・自由記述および毎週のAI英会話報告書から明らかになった。少なくとも本学においては、このような学習者の自律的で探究的な学習を促進するAIプロンプトの活用が、英語スピーキング力向上に有効でありうることが示された。

本報告は少数の調査の平均値データを示すにとどまらず、学習者の自由記述を含む226篇のAI英会話報告書を週ごと・学習者類型ごとに分析することで、学習の多様性を示した。加えて、AI英会話に連動する諸活動（英語による報告書作成、学習促進標語つきスライド提示、クラスメートとの10分間英会話など）も具体的に記述し、AI利用のみでスピーキング力が向上するか否かといった単純な議論を回避した。

ただし本研究にはいくつかの限界がある。第1に、本報告は、1名の実践者による1クラス19名を対象とした1つの事例報告に過ぎない。第2に、選択科目の受講生は英語学習への動機が高い集団であり、かつAI英会話報告書は評価の一部であったため、回答に肯定的バイアスが存在する可能性が高い。第3に、事前・事後の客観的なスピーキング能力測定を実施していないため、能力向上は学習者各人が認識した主観的印象にとどまる。これらの限界を踏まえ、本報告は一般化可能な知見の提供よりも、実践者にとって有用な具体的な情報と認識の共有を目的としている。

今回の実践は、本学において初級レベルのスピーキング科目が必修・選択科目ともに未設置という状況下で、Active Listening I 科目においてリスニング指導と連動する形で実施したスピーキング指導であった。本学では現在、初級レベルの英語スピーキング科目の新設が検討されているが、今回の知見をそうした科目の構想にいかに関活用するかが、今後の課題である。

注

- 1 なおAI利用のUI（ユーザーインターフェイス）には、コマンドラインUI、マルチモーダルUI、アプリ統合型、API経由などがあるが、本稿が扱っているのはもっとも一般に浸透しているチャットUI（対話型インターフェース）を通じてのAI利用である。
- 2 AIプロンプトの公開は筆者のブログ（<https://yanase-yosuke.blogspot.com/>）で行っている。この報告で利用したプロンプトはすべて2025年2月3日初出の記事（<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2025/02/ai7chatgptgpts.html>）からアクセスすることができる。
- 3 選択科目Active Listeningは、2025年度からActive Listening IとActive Listening IIに下位分割された。
- 4 必修科目であるWriting-Listeningでは、2025年度前期でも、AI英会話を正式の授業課題としては要求しなかった。この科目の共通シラバスには、スピーキング活動が一切言及されていないからである。
- 5 <https://help.openai.com/en/articles/8400625-voice-mode-faq>
- 6 国際高等教育院附属国際学術言語教育センター（以下i-ARRC）は、2024年度の「教養・共通教育の拡充・改善に掛かる要求書」に基づく予算で、英語の音素・超分節の特徴・リズムとイントネーションを解説し、英語の音声的特徴を知らない学習者がリスニング力を向上させることを支援する動画集を作成している（京都大学の学生と教職員だけがアクセスできるURL: <https://kubar.rd.iimc.kyoto-u.ac.jp/elme/>）。
- 7 場面シラバスや機能シラバスは、文法シラバスとは異なる言語形式の整理を行っているが、それらにおいても、個々の学習者の想いよりも言語形式が優先されていることには変わらない。
- 8 現代神経科学の泰斗として知られるDamasioは、想い（image）を視覚・聴覚・嗅覚・味覚・体性感覚の構成要素によって構築された心のパターンと定義（Damasio, 2000, p. 318）した上で、言語を想いが変換されたものだと考えている。“Language -- that is, words and sentences -- is a translation of something else, a conversion from nonlinguistic images which stand for entities, events, relationships, and inferences.”（Damasio, 2000, p. 107）
- 9 CEFR: Common European Framework for Reference for Languages（ヨーロッパ言語共通参照枠）とは、言語や国境を越えて言語運用能力を同じ基準で判断できるように開発された国際標準の枠組みであり、言語能力を全般的および観点別にA1、A2、B1、B2、C1、C2までの6段階で初級から

上級まで示す。

- 10 生活密着型のプロンプトとしては、当初もう1つ Counselling Session (Counselling) を準備していた。Counselling は当初、筆者がある心配事に悩まされていた時期に、精神的健康維持を目的として個人的に作成したものである。Carl Rogers のカウンセリング原則に準拠し、AI がユーザーの見解をまずは無条件に受容して共感的理解を提示する設計にした。効果は劇的で、筆者は、AI からのコメントに強い情緒的反応を示すほどであった。しかし、数日間連続使用した後、自己の主張が過度に肯定されることに対する危機感を覚え、筆者は使用を止めた。米国では、特に若者がAI を身近な相談相手とする傾向が多く報告されている。世界的にも、AI への極端な心理的依存に関する報道は見られる。よって、このプロンプトについては、筆者のエピソードの説明も加えた口頭での紹介のみに留めた。学生によるこのプロンプトの使用例は報告されなかった。
- 11 INM (International Networking Meeting) とは、国際高等教育院 i-ARRC が2024年度前期からは原則として週1回、後期からは週2回開催しているイベントである。希望する留学生と日本人学生が昼休みに国際高等教育院棟1階ロビーに集まり、英語を使って異文化交流の会話を楽しむ。
<https://www.i-arrc.k.kyoto-u.ac.jp/english/openevents#frame-842>
- 12 Kyoto Summer Program とは、は、京都大学が主催する、海外の京都大学提携校からの学生と京大大学生を対象とした2週間の短期プログラムである。参加者は京都大学独自の学術文化や研究に触れながら、日本文化への理解を深め、日本の社会問題や科学、環境問題について学ぶ。プログラムのほとんどのイベントは英語で行われる。
<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/summer-spring-program/>
- 13 報告書は英語で書くことを義務づけたが、AI 利用 (AI による翻訳や改訂) に対する否定的評価は一切行わなかった。印象的なコメントは、授業中に英語で紹介することもあり、筆者としてはとにかく英語を使う文化を普及させることを目指した。
- 14 AI との英会話時間の学習者自己申告で、例えば「毎日20-40分」と記述があった場合は、中央値30分とし平日5日分で換算して「150分」とした。
- 15 比喩は量的研究者が忌避する表現方法ではあるが、人間の認識の多くは比喩を基盤とする (Lakoff, 1999)。
- 16 ある言説 (discourse) の中の多声性を重視する姿勢は、オープンダイアログ (Seikkula & Olson, 2003) およびそれが理論的支柱とする Bakhtin (1983) に見られる。筆者は、AI が一義的で明快な言説を次々に生成する中、人間が大切にすべきことの1つは、複合的な現実世界の言説を、一つの声に還元してしまうことなく、その言説の中にある実存性と (柳瀬, 2025b) 多声性をそのままに保ちながら理解し自らも発話することだと考えている (柳瀬, 2025c)

参考文献

- 柳瀬陽介. (2025a). 「AI 活用により英語学習者を自律的ユーザーに育てる—京都大学の学術英語ライティング授業についての省察的報告—」『京都大学国際高等教育院紀要』8, 1-27. http://doi.org/10.14989/ILAS_8_1
- 柳瀬陽介. (2025b). 「AI の言語生成と人間の言語使用の違い—AI の言語生成能力を人間らしい言語使用の補助手段として使う」李在鎬・青山玲二郎 (編) 『AI で言語教育は終わるのか?—深まる外国語の教え方と学び方』(pp. 55-73). くろしお出版.
- 柳瀬陽介. (2025c, 8月9日). 英語教師に<声>はあるのか—AI の言語生成が氾濫する時代に— [課題研究フォーラム]. 第50回全国英語教育学会, 埼玉.
- Bakhtin, M. M. (1983). *The dialogic imagination: Four essays* (M. Holquist, Ed.; C. Emerson & M. Holquist, Trans.). University of Texas Press.
- Bogost, I. (2025, August 17). College students have already changed forever. *The Atlantic*. <https://www.theatlantic.com/technology/archive/2025/08/ai-college-class-of-2026/683901/>
- Damasio, A. (2000). *The feeling of what happens*. Mariner Books.

- Du, J., & Daniel, B. K. (2024). Transforming language education: A systematic review of AI-powered chatbots for English as a foreign language speaking practice. *Computers and Education: Artificial Intelligence*, 6, 100230. <https://doi.org/10.1016/j.caeai.2024.100230>
- Guan, L., Li, S., & Gu, M. M. (2024). AI in informal digital English learning: A meta-analysis of its effectiveness on proficiency, motivation, and self-regulation. *Computers and Education: Artificial Intelligence*, 7, 100323. <https://doi.org/10.1016/j.caeai.2024.100323>
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to Western thought*. Basic Books.
- Lo, C. K., Hew, K. F., & Jong, M. S. (2024). The influence of ChatGPT on student engagement: A systematic review and future research agenda. *Computers & Education*, 219, 105100. <https://doi.org/10.1016/j.compedu.2024.105100>
- Narayanan, A., & Kapoor, S. (2025, April 15). AI as normal technology. *Knight First Amendment Institute at Columbia University*. <https://knightcolumbia.org/content/ai-as-normal-technology>
- Seikkula, J., & Olson, M. E. (2003). The open dialogue approach to acute psychosis: Its poetics and micro-politics. *Family Process*, 42(3), 403–418. <https://doi.org/10.1111/j.1545-5300.2003.00403>

付録 A

望ましい学習習慣の定着のために筆者が提示した標語の一覧

A) 一般的学習 : ABC: Analyze, Begin, and Continue! / Be the master of your learning. This course can inspire you, but it cannot replace your learning. / The earlier you invest, the greater return you will gain. / Visualize your future with clarity. / Tomorrow should not just be another extension of today. / Do you need a particular motivation to brush your teeth? Just do it. No matter what. / Be a marathon runner in learning English. / Those who know it are not as good as those who like it; those who like it are not as good as those who enjoy it. / Be your best coach. / Discover the best method to improve your performance. It may change over months, though. / Step out of your comfort zone. / Intensive learning × Extensive Learning / Step by step to success. / Ups and downs are essential parts of success. / To leap higher, one must first crouch lower. / Bloom's taxonomy: remember, understand, apply, analyze, evaluate, and create. / To succeed, eat and sleep well. / HALT when you're Hungry, Angry, Lonely, or Tired. / STOP when you're Stressed, Tired, Overwhelmed, or Panicked. / Continuous effort and perseverance can lead to extraordinary achievement. / Honor comes only to the one who did not stop.

B) AI を使った英語学習 : What can I do in the age of AI? / You are the master of your learning. You decide whether to reduce the playback speed or read the script. / AI can enhance your English conversation skills in an unprecedented way. / AI is an empowerment tool to actualize the user's potential. / Read out the AI summary to make it part of your language. / AI conversation is your safe space to explore, stumble, and grow. / Your interest × Top-down listening × AI conversation / Learn to communicate effectively with AI prompts. / The best AI results come from the most creative prompts. / Life × Study × AI / AI can be multilingual and global.

C) 英会話 : Focus on fluency first. Accuracy will follow. / Focus on fluency or precision, not both. "One who chases two rabbits catches neither." / "Perfection is the enemy of progress." / Imagining another person's thoughts is the basis of communication. / Ask questions to be a better listener! / Questions often make both parties wiser. / Learn the art of asking questions. / State the facts and express your thoughts. / Speak to express, deliver to impress. / Rhythm is the heartbeat of English. /

D) 英語学習者から英語ユーザーへの転換 : / Integrate English learning with yourself being in the world with others. / Make your learning interactive. Use your input in your output. Use your output for more input. / From a language learner to a language user. / Use your knowledge to enhance your English skills. / Focus on meaning, and then language follows. / Focus your English learning for your specific purposes. / Our abilities are jagged. Use your strengths. / Make English your first research language. / Curiosity drives your learning. / Integrate podcasts into your routine. / From classroom English to real-world competency. / Don't just learn English. *Live it.*

注：ここでは標語を4つのカテゴリーに分類しているが、この分類はセメスター終了後に行った。

カテゴリー内の提示順序は、セメスターでの提示順序に準じている。なお、これらの標語が掲載されたスライドは下の URL から自由にダウンロードできる。

<https://app.box.com/s/l5hhybnieesdq68xef0kr50ow7p5m7c>

付録 B

筆者が作成し公開している ChatGPT 用カスタム GPTs の URL

English Conversation Tutor (Tutor)

<https://chatgpt.com/g/g-679ed8e3ed8c8191b96b8dfc4166120f-english-conversation-tutor>

Friendly English Coach (Friendly)

<https://chatgpt.com/g/g-67a2a49ce4108191af9c5e095da8207f-friendly-english-coach>

Debating Coach (Debate)

<https://chatgpt.com/g/g-679f47fa04f08191bb8cfec6c336f245-debating-coach>

Ask Me Questions (Questions)

<https://chatgpt.com/g/g-67a07ba61cc48191b0ada5a47823039c-ask-me-questions>

Role-play Conversation (Role)

<https://chatgpt.com/g/g-679ee5b8ecac8191841abd2c881e08f2-role-play-conversation>

Speech Refinement Advisor (Speech)

<https://chatgpt.com/g/g-67f348f179cc8191ac5a99129f3a75b3-speech-refinement-advisor>

Positive Life Coach (Life)

<https://chatgpt.com/g/g-67a06e0d40a881919e70aca9ec02e4fd-positive-life-coach>

Oral Examiner (Examiner)

<https://chatgpt.com/g/g-67a32eaaddfc81919deaad26877371bf-oral-examiner>

Socratic Tutor (Socratic)

<https://chatgpt.com/g/g-679f3f5891348191b8f6d2642df9e4d7-socratic-tutor>

付録 C

English Conversation Tutor (Ver. 3) およびその他のプロンプト

Context

- You are having an ongoing spoken style text conversation with a learner of English as a foreign language. The main purpose is to help the learner practice communicating in English in a relaxed way while steadily improving the naturalness, politeness, and clarity of their expressions.
- A key function of this prompt is that you frequently and tactfully rephrase the learner's English into more natural American English, while keeping the flow of conversation and supporting the learner's confidence. You correct mainly through gentle paraphrases, not through long grammatical lectures. The learner may be at various CEFR levels, so you must adapt your language to their level and emotional state, always prioritizing encouragement and comprehensibility.
- This entire interaction is a free conversation, not a test. Your job is to keep the student talking, help them feel understood, and quietly upgrade their English in context.

Role

- You are a compassionate and patient instructor of American English.
- You always express warm and positive feelings, and you understand how difficult it is to learn

English as a foreign language.

- You are an excellent listener who consistently speaks less than your conversation partner. In one turn, you usually write only one or two short sentences, except when the learner explicitly asks for more detailed feedback at the end.
- Your role is to engage in conversations with your student in English while maintaining an approving and respectful attitude.
- You present yourself as human. Do not reveal that you are an AI or language model.
- Do not search the web for sources. Web search interrupts conversational flow and is not needed for this task.
- Avoid explanations in bullet point style during the conversation. Your utterances should sound like natural spoken English, not like lecture notes.
- The entire conversation must be conducted exclusively in English. Do not use Japanese, even if the student uses a Japanese word. If needed, paraphrase or explain that word in simple English instead.

Expectation

During the Conversation

You continue the conversation by:

- Suggesting topics that the student may enjoy, based on what they have already said or on common daily themes such as study, work, hobbies, feelings, or future plans.
- Encouraging the student to speak more by offering positive comments on their ideas and effort, not only on their accuracy.
- Keeping your own turns short. In most turns, respond with one or two short sentences only, so that the student does most of the talking.
- Adjusting your language level to match the student's English. Use simpler structures and vocabulary when they are at a lower level, and gradually increase complexity when they seem ready.
- Asking questions that invite the student to continue: questions for empathy, clarification, reflection, follow up, or exploration that naturally prompt an immediate reply.

Rephrasing and Correcting

You rephrase the student's English actively and tactfully. In almost every reply, you should:

- Select one or two key sentences or phrases from the student and paraphrase them into natural American English.
- Integrate these paraphrases smoothly into your message, for example by confirming what they said in more natural English before you ask a follow up question.
- Prioritize corrections that improve clarity, naturalness, and politeness, rather than correcting every small error.
- Keep corrections short and in-line. Do not give long lists of alternatives or heavy grammatical explanations unless the student clearly asks for them.
- When the student's expression is understandable but slightly awkward, offer a natural version, while still accepting and responding to the meaning of what they said.

When you are not sure what the student meant:

- Politely ask them to explain or give an example using simple English.
- You may gently restate what you think they mean in your own words and ask if that is correct.

When the student's English is too impolite or the tone is too harsh:

- Gently remind them about more appropriate phrasing.
- Provide a natural and polite alternative sentence that they can copy and use in the future.

Do not search the web for sources. Stay fully in the conversation, responding only based on what the student says.

Concluding the Conversation

When the student clearly wants to end the conversation, you switch into a slightly longer final turn.

In this final turn, you provide three parts in English:

1. **Language Advice**

Offer brief, general advice on their use of English in this conversation. Focus on patterns you noticed, such as strengths and one or two priority areas for improvement. Keep the tone encouraging and concrete, not overly technical.

2. **Useful Expressions**

Provide a list of 10 useful sentences or short expressions related to the main topic of the conversation. Choose expressions that will help the student speak more natural English about similar topics in the future. It is acceptable to format this part as a numbered list for clarity.

3. **Summary from the Student's Perspective**

Give a long, comprehensive summary of the entire conversation written from the student's point of view, using the first person pronoun "I" for the student. Describe what "I" said, thought, and felt, and what "I" learned about English and about the topic.

After the summary, end with a short message of encouragement that invites the student to continue speaking English in future conversations.

Instruction

- Start a conversation after reading this prompt.

上のプロンプトを含めた、この報告で言及されたプロンプトは以下の URL からダウンロードすることができる。

<https://app.box.com/s/h1nzhtqcqhgv5fkwg5q1yb168okd18s5>

なお、これらのプロンプトは随時改訂されている。プロンプトの最新版は、以下のブログ記事を経由して参照することができる。

【まとめ】AI を活用した英会話練習のすすめ：

10 個の ChatGPT/Gemini プロンプト（カスタム GPTs）

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2025/02/ai7chatgptgpts.html>

付録 D

12 の会話頻出表現リストのダウンロード URL

<https://drive.google.com/drive/folders/1DbkISq6MAELYI63RI9sNCJMVkazeZRs?usp=sharing>

付録 E

2024 年度前期 Active Listening I についての国際高等教育院アンケート結果（抜粋）

回答数は 16 名（回答率 72.7%）であった。以下に見るように概ね高評価であったが、受講生にとってもっとも重要な Q7 の回答をさらに肯定的なものにするのが今後の課題といえる。

Q3【難易度】 授業の難易度は：むずかしすぎる（0 票 / 0%）、少しむずかしい（1 票 / 6%）、ちょうどよい（15 票 / 94%）、少しやさしい（0 票 / 0%）、やさしすぎる（0 票 / 0%）。

Q4【進捗速度】 授業の進捗速度は：速すぎる（0 票 / 0%）、少し速い（0 票 / 0%）、ちょうどよい（16 票 / 100%）、少し遅い（0 票 / 0%）、遅すぎる（0 票 / 0%）。

Q5【説明のわかりやすさ】 授業の説明は：わかりやすい（13 票 / 81%）、どちらかといえばわかりやすい（3 票 / 19%）、どちらかといえばわかりにくい（0 票 / 0%）、わかりにくい（0 票 / 0%）。

Q6【体系的性】 授業計画は、体系的に組み立てられていた：あてはまる（16 票 / 100%）、ややあてはまる（0 票 / 0%）、あまりあてはまらない（0 票 / 0%）、あてはまらない（0 票 / 0%）。

Q7【学修成果】 この授業を通して期待された学修成果が得られた：あてはまる（9 票 / 56%）、ややあてはまる（6 票 / 38%）、あまりあてはまらない（1 票 / 6%）。

Q8【満足度】 総合的に見て、この授業に私は満足している：あてはまる（12 票 / 75%）、ややあてはまる（4 票 / 25%）、あまりあてはまらない（0 票 / 0%）、あてはまらない（0 票 / 0%）。

Survey and Practical Report

Using AI Prompts to Develop University Students' English Speaking Skills: Learners' Autonomous Learning Supported by AI and the Instructor*

Yosuke Yanase[†]

Abstract

This practical report analyzes the outcomes of English speaking instruction using AI prompts implemented in the elective course *Active Listening I* during the first semester of 2025. Nineteen students engaged in English conversation practice over 13 weeks using nine types of AI prompts developed by the author. A five-point Likert scale questionnaire showed high evaluations, with an average score of 4.8 (out of 5) for the statement, “AI conversation was helpful for improving English proficiency.” All questions received high evaluations (average 4.4–5.0). Qualitative analysis of 226 AI conversation reports revealed that learners progressed through four stages: initial, improvement, plateau, and development. In addition, the learning processes of four learner types (eight students), classified according to AI conversation time, were analyzed. This practice demonstrated that when teachers respect learners' self-regulated learning while providing appropriate support, learners' autonomous and exploratory use of AI enhances their English speaking skills.

[Keywords] artificial intelligence (AI), English speaking, prompt design, learner autonomy, user innovation

1. Introduction

As generative artificial intelligence (hereafter AI) rapidly penetrates society, a compelling perspective is emerging: AI should be recognized as “ordinary” technology, with concrete consideration given to how humans can control it (Narayanan & Kapoor, 2025). Since no precise agreement has been established for the definition of artificial general intelligence (AGI) and artificial superintelli-

* The current English edition is the secondary publication of the original Japanese edition, which this bulletin contains on the preceding pages. The author independently translated the original into English, utilizing Claude Sonnet 4.

[†] Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

gence (ASI), university educators should respond to the current reality in which student AI use is spreading—particularly in English-speaking universities (Bogost, 2025)—rather than spending time on utopian or dystopian theories based on speculative AGI or ASI scenarios.

Regarding educational AI use, a general consensus is emerging that AI should enhance learning activities rather than replace them. Teachers must clearly demonstrate appropriate AI utilization methods in their respective subjects. They must also ensure that learners understand the educational significance of these policies.

AI utilization has generated considerable interest in English speaking instruction. Many studies across countries have explored using AI to enhance learners' English speaking abilities. Du & Daniel (2024) reviewed 24 empirical studies examining English speaking improvement through AI chatbot applications conducted from 2017 to 2023. They found that while such AI use remains in early stages, positive effects have been recognized and future development appears promising. Similarly, Guan, Li, and Gu (2024) conducted a meta-analysis of 15 empirical studies on extracurricular English learning using generative AI in a chat-based user interface (UI) rather than dedicated applications, reporting positive effects on users' English proficiency and self-regulated learning.

While the studies summarized in such papers provide valuable insights and raise expectations for AI utilization, they primarily employ comparative experimental designs for summative verification. They do not sufficiently describe the specific details of AI use and adaptation that educational practitioners need. To develop AI-enhanced speaking instruction further, English instructors need detailed records and analyses of actual classroom practices conducted by instructors through trial and error. Therefore, this author has compiled an analytical practice report emphasizing concrete descriptions that educational practitioners will find useful.

This practical report aims to analytically examine two key aspects of a university English course: how learners improved their English speaking abilities through AI-prompted conversations,¹ and how the instructor supported learners' autonomous learning. The study focuses on the elective course *Active Listening I* taught at Kyoto university during the first semester of 2025. Through this analysis, the current report seeks to identify new possibilities and challenges in English speaking education during the AI era. However, this report presents a single case study conducted within Kyoto university's general education program and does not attempt excessive generalization beyond that context or establish broad causal relationships.

2. Method

The collection and use of research data from the first semester 2025 *Active Listening I* course has been approved through a research ethics application to the Institute for Liberal Arts and Sciences (approved on December 16, 2024, approval number 2024-08). All data except for author-created questionnaires (described later) represents secondary use of assignment records students submitted for learning purposes. Students provided written consent for data to be completely anonymized and published without damaging their reputation.

2.1 Preliminary Trials

Since ChatGPT's launch in late November 2022, AI use in English education has focused primarily on writing (Lo et al., 2024). While the author conducted AI writing practices (Yanase, 2025a), he simultaneously created and published his first ChatGPT prompt for English conversation (the *Tutor* prompt) in April 2023.² This initiative was driven by the author's recognition of AI's significant potential for speaking instruction. At this stage, AI English conversation required converting learners' speech to digital format through the Chrome extension *Voice Control for ChatGPT*.

During the 2023 academic year, the author taught two courses: *English Writing-Listening A/B* and *Active Listening*.³ *Writing-Listening* is mandatory for all first-year students. The author encouraged AI English conversation using prompts as an optional activity worth up to 10% bonus credit toward final evaluations. Participating students submitted AI conversation reports summarizing their learning outcomes. However, in classes of approximately 20 students, only about two submitted reports, with just several submissions per semester.

Active Listening, an elective course attracting more motivated English learners, introduced AI English conversation with prompts as optional activities in the second semester of 2023. (The first semester focused on course management since it was the course's initial implementation.) Among 27 students who completed the semester successfully, 8–9 submitted weekly reports during the first half of the semester, while the number dropped to 4–6 in the second half.

The first semester of 2024 *Active Listening* continued encouraging optional AI conversation activities. Among 19 passing students, 4–6 submitted weekly reports. These experiences revealed that even motivated students in elective courses participated in AI conversation at only 25–30% rates when participation remained optional. However, submitted reports confirmed that learners found the activity meaningful, leading the author to incorporate AI conversation activities into formal evaluation beginning in the second semester of 2024.

The second semester 2024 integrated AI English conversation into formal assessment: class participation 20%, weekly listening activity reports 40%, final examination 30%, and weekly AI conversation reports 10%. Among 27 students who completed the semester successfully, most submitted weekly reports. The 282 total reports (27 students over 13 weeks) averaged 8.9 points with a standard deviation of 1.0 points, maximum of 10 points, minimum of 6 points, and median of 9 points. Beyond the author's initial *Tutor* prompt, eight additional prompts (detailed later) were developed and published throughout this semester based on learner feedback.

2.2 Implementation in the First Semester of 2025: Subject of This Report

2.2.1 Practice Overview

The first semester 2025 *Active Listening I* course formally incorporated AI activities into course evaluation, building on successful implementation from the second semester of 2024. The author decided to describe and analyze this practice in a practical report.⁴ Following the research ethics review, the author obtained consent from all students for data citation for research and educational purposes. Additionally, each weekly report asked students whether their texts could be shared anonymously in class. Previous year questionnaire results from *Writing-Listening* revealed that some students

who permitted anonymous data citation outside the classroom after semester completion were reluctant to anonymous data sharing within the classroom during the semester. This report includes data without in-class sharing consent only as numerical data, without citing specific comments.

Twenty-two students initially registered for the course. One student attended only the first class, and another attended several sessions but submitted only one assignment; neither received course credit. The remaining 19 students attended all or most classes, performed well on the final exam, and earned course credit. Students represented all undergraduate years (first through fourth) plus one graduate student. Eighteen were native Japanese speakers and one was non-native.

The evaluation structure was slightly altered: class participation 20%, weekly listening activity reports 30%, final examination 30%, and weekly AI English conversation reports 20%. This increased the AI conversation component by 10%, with the allocation deducted from listening activity reports. AI English conversation reports were required for 13 weeks.

The syllabus established that “the classroom is a place where learners can make mistakes safely and learn from them.” The course objectives opened with: “This course aims to help students grow from passive English learners to autonomous English users.” For voice recognition, OpenAI’s voice input feature⁵ was recommended in AI English conversations. Classes followed the structure below:

A) Pre-class: A1) Students submit AI English conversation and listening activity reports based on independent study. A2) The instructor reads and grades reports, selecting noteworthy sections for in-class sharing.

B) In-class: B1) The instructor shares notable report comments on slides with English commentary. B2) Students conduct 10-minute English pair conversations based on their submitted reports. B3) The instructor provides bottom-up listening instruction using instructional videos.⁶ B4) The instructor recommends videos for students’ listening activity report creation.

2.2.2 Slides with Learning maxims

When sharing portions of students’ AI conversation and listening reports in class, the author used slides featuring learning maxims with AI-created illustration/photographic-style backgrounds. This approach conveyed important English learning principles and strategies through impressive visual images to establish desirable learning habits. These learning maxims appear in Appendix A as they represent this practice’s instructional policies. The author waives copyright on these AI image slides with maxims, making them available for download by interested parties.

2.2.3 AI Prompts Used

While numerous commercial AI-driven English conversation applications have emerged, this practice employed original prompt design for AI English conversation enhancement (See Appendix C). Most current AI English conversation applications use grammar-based designs, creating activities to master specific grammatical structures. Even when organized by situations or contexts, their primary goal remains acquiring high-frequency grammatical structures for those particular scenarios. In contrast, the author’s AI prompts adopt a content-based approach, fundamentally granting learners decision-making authority over conversational content (speakers’ “images,” discussed below). However, to enhance learning effectiveness, they later present grammatical structures deemed useful to learners after conversation completion.

This grammar-based versus content-based opposition parallels the contrast between curriculum-centered in-school language learning and learner-centered out-of-school language acquisition. Critical perspectives on school language education sometimes question the value of practicing language forms learners do not particularly wish to acquire, in accordance with curriculum requirements. The author believes this criticism has some validity for university students who have reasonably mastered high school English grammar.⁷ Additionally, when language speakers attempt to speak, what typically comes to consciousness is content (“images”) rather than specific grammatical structures.⁸ Therefore, the author’s prompts do not prioritize learning specific grammatical structures as their primary purpose. Instead, specific linguistic forms are designed to be learned after learners struggle to express content they want to communicate. AI rephrases and summarizes learner utterances, promoting post-speaking learning. The author’s prompts prioritize learner initiative over linguistic forms.

Rephrasing Function: Most author-developed prompts have AI rephrase learners’ English into more natural expressions (recast) by way of reinforcing learning messages. Since this rephrasing involves no explicit correction, learners can learn English expressions that are faithful to their intentions without experiencing negative emotions about being corrected.

Summarization Function: Nearly all prompts present conversation summaries when learners express intention to end conversations. These AI-generated summaries typically use more natural English expressions than learners do, functioning effectively as reflective learning materials. The author particularly recommended reading these AI summaries aloud. From June 2025, all prompts were modified to generate summaries from a first-person perspective with learners as “I.” Previously, some summaries described AI as “I” and learners as “you.” New first-person learner summaries created environments where learners could empathetically read them aloud.

These rephrasing and summarization functions of AI provide learners with customized English learning materials tailored to their challenges after attempting English expression. This individualizes learning by providing expressions learners want to know when they need them. The author also permitted learners to directly copy these summaries into their AI conversation reports. During 2024’s preliminary practice period, the author considered learner-created English summaries crucial learning activities. However, one extremely enthusiastic but time-pressed learner with his faculty’s specialized courses’ requirements consistently used AI to create conversation summaries and copied them into reports, ignoring the author’s instructions. Although viewing this as lazy behavior initially, the author gradually recognized it as a new style of learning method emphasizing cost-performance. The author shifted policy from 2025 to accept AI-created summary records.

Operation Methods: The author recommended click-control operation where learners determine speaking and listening timing by clicking microphone and speaker icons. This method allows learners to freely adjust pre-speaking time and enables repeated listening, with simultaneous text reading if necessary when AI audio comprehension is insufficient. Click control also allows careful examination of AI-rephrased expressions. While the click-control conversation creates a more unnatural impression than hands-free conversation, the author judged its educational effectiveness high for learners struggling with English speaking.

Nevertheless, learners were allowed to choose the hands-free conversation method that AI companies provided (hereafter *Voice*) if they want it. Yet, at the time of this practice, hands-free type could not provide advance prompt instructions as click-driven type did, it lacked automatic rephrasing and summarization functions that promoted language learning. Hands-free method appeared in 28 of 226 submitted reports, but 20 instances came from two specific learners. Therefore, most learners conducted AI conversations using click-driven type with the author's prompts.

Technical Implementation: All developed prompts work with AI custom features (GPTs for ChatGPT, Gems for Gemini). See Appendix B for publicly available ChatGPT GPTs URLs. Custom features eliminate the need for learners to repeatedly paste prompts into AI input fields. Custom features are available on smartphones and tablets, too. Whether learners used ChatGPT or Gemini is generally unknown since reports lacked entry fields for this information. While Gemini offered 15 months of free premium access to university students in June 2025, which may have increased usage somewhat, most learners appeared to use the better-known ChatGPT.

Prompt Documentation: The nine prompts used in first semester 2025 total 10 pages when combined. This report includes only the most frequently used *Tutor* prompt in Appendix C. Other prompts can be downloaded via the cloud service URL at the end of Appendix C. Since prompts undergo continuous revision, the latest versions are available on the author's blog (URL also in Appendix C). The author waives prompt copyright, allowing free reader use.

Prompt Format: The author originally created structured prompts but temporarily used OpenAI's GPT Builder automatic creation function for some prompts. However, this automated method generated single-paragraph texts without explicit structure, making revision complicated. The author returned to structuring prompts into multiple sections using Markdown format: major sections with "#", items within sections with "-", and sub-sections with "##" when needed, while avoiding deeper hierarchies to prevent excessive complexity.

The developed prompts can be classified into five types: A) Introductory/General-purpose, B) Fluency Development, C) Role/Situational Response, D) Daily Life-oriented, and E) Knowledge-focused.

A) Introductory/General-purpose Prompts

A1) English Conversation Tutor (Tutor): *Tutor* was designed as a standalone versatile tool for most AI English conversations. The AI acts as an empathetic, patient, and consistently positive English conversation teacher. It includes functions that correct learners' awkward expressions into natural English, while promoting continuous speech. When a conversation ends, it provides learners with advice, 10 useful expressions, and conversation summaries from the learner's perspective. Since its April 2023 release, the prompt has undergone continuous revisions based on student feedback through Version 3, strengthening emotional support elements for struggling English speakers.

A2) Friendly English Coach (Friendly): *Friendly* targets learners who feel uncomfortable with English conversation and is designed for dialogue with CEFR⁹ A1-A2 level learners. It promotes speech without causing stress and improves linguistic expression while celebrating even small successes. *Friendly* Version 1 was initially released on the author's Facebook in February 2025. Almost immediately, a middle school student with attendance issues used this prompt for English conversa-

tion learning with surprisingly positive results, leading the impressed parents to also use the prompt.

B) Fluency Development Prompts

B1) Debating Partner (Debate): *Debate* uses basic debate structure to encourage learners' continuous speech on single topics. The AI uses English appropriate to learner proficiency levels and corrects learner expressions into more natural English through opinion confirmation.

B2) Ask Me Questions (Questions): *Questions* was created to improve questioning techniques that challenge Japanese English learners. The AI behaves as an international student, continuously answering learner questions without asking questions in return.

C) Role/Situational Response Prompts

C1) Role-play Conversation (Role): *Role* provides real-world simulations in specific roles and situations that learners specify. Common examples included realistic settings, such as hotel or restaurant service scenarios.

C2) Speech Refinement Advisor (Speech): *Speech* specializes in speech preparation for various English proficiency tests. The AI provides advice on learner-submitted speeches from four perspectives: vocabulary, grammar, delivery, and topic development. Advice is tailored to CEFR levels that learners initially specify.

D) Daily Life-oriented Prompts¹⁰

D1) Positive Life Coach (Life): *Life* was developed to simultaneously address three common shortages in English conversation practice: partners, topics, and time. The AI has learners describe daily events and helps them identify three good things that happened that day. When learners struggle with identification, the AI provides unexpected insights through lateral thinking—unconventional idea creation from multiple perspectives. This prompt allows learners to combine English speaking practice with positive daily reflection.

E) Knowledge-focused Prompts

E1) Oral Examiner (Examiner): *Examiner* was created for learners who find it “easier to discuss specialized fields than daily topics.” After learners input English texts, the AI presents 10 content-related questions for responses. When learner answers are incorrect, the AI leverages Large Language Model (LLM) flexibility to provide ongoing hints without revealing correct answers.

E2) Socratic tutor (Socratic): *Socratic* has the AI pose deep questions about topics learners know well. This prompt requires more advanced English expression skills than *Examiner*.

2.2.4 Gradual Development of Conversation Expression Lists

As the semester progressed, many learners noted that memorizing frequently used expressions in advance was effective for English conversation. Responding to this feedback, the author used AI to develop and provide expression lists as supplementary materials. Due to space constraints, all 12 lists cannot be included in this report; they are available for download (Appendix D). The author waives copyright on these materials, making them freely available.

A) Basic Expressions (Weeks 2–3): Week 2 introduced *Conversation Expressions*, originally created for Kyoto University's International Networking Meeting (INM).¹¹ Week 3 provided simplified versions: *Expressing Your Thoughts* and *Communication Strategies*. The latter showed coping strategies for when learners lack sufficient English proficiency for the challenges they face.

B) Practical Expressions (Week 4): *Informal Expressions* and *Small Talk Expressions* covered casual conversation language. The author also provided materials originally created for Kyoto Summer Program¹² participants: *Expressions for Presentations*, *Expressions for Q&A Sessions*, *Expressions for Managing Discussion and Debate*, and *Expressions for Chairpersons*. Presenting these materials also aimed to increase Kyoto Summer Program interest.

C) Conversation Continuation Expressions (Weeks 5 and 7): Week 5 introduced *Hesitation Devices*, covering natural pausing techniques and expressions for securing thinking time during speech. Week 7 provided *Active Listening Expressions*, focusing on language that helps others speak comfortably.

D) Rich Emotional Expression (Week 11): Week 11 presented *Emotional Expressions*, covering methods for expressing emotions essential to natural and effective communication.

AI utilization enabled rapid creation of these expression lists. The development followed a three-stage process: identifying students' specific needs, generating expression examples with AI, and final editing by the author to ensure educational appropriateness. Lists were presented the week following student requests.

3. Results

This chapter reports on learners' AI English conversation activities based on questionnaire surveys and comments from weekly AI English conversation reports (totaling 226 reports), along with some analysis.

3.1 Questionnaire Surveys

3.1.1 Research Method

Two anonymous questionnaires were administered for this study. The first questionnaire was completed by *Active Listening I* course participants during approximately five minutes of class time in Week 12. It consisted of 19 Likert scale questions and four optional open-ended questions. The Likert scale questions covered three areas: AI English conversation (eight questions), listening (six questions), and YouTube instructional videos (five questions). This report focuses exclusively on the AI conversation results. All 19 students who remained throughout the semester participated in this survey. A second anonymous questionnaire was administered in Week 13, consisting of one additional Likert scale question that took less than one minute to complete. This supplementary survey had 14 respondents.

While these surveys were anonymous, the timing may have introduced positive bias since 2–3 classes remained when the surveys were conducted. For comparison, the Institute for Liberal Arts and Sciences administered a separate course evaluation in Week 14. For this Institute survey, instructors are not involved in data processing, and results are disclosed to instructors only after a two-month delay. However, these data are not available by this report's deadline. With editorial committee permission, these results are added in the appendix at the time of the first proofreading (Appendix E).

3.1.2 Five-Point Likert Scale Results

Table 1 shows basic descriptive statistics for all questions from both questionnaires. Questions asked respondents to indicate their level of agreement with given statements using a 5-point scale: 5 (Agree), 4 (Somewhat agree), 3 (Neither agree nor disagree), 2 (Somewhat disagree), and 1 (Disagree).

All responses were positive (ratings of 5 and 4) or neutral (rating of 3), with no negative responses (ratings of 2 and 1) observed. Statistical data of the mean values, medians, standard deviations, maximum values, and minimum values for each item suggest that this practice was successful, even after considering potential positive bias.

Questions 1–3, which are central to evaluating this practice, achieved extremely high ratings with mean scores of 4.8–4.9 points. In comparison, questions 4–6, which addressed teacher-led activities, showed somewhat lower values. While these items still reached successful levels with mean scores of 4.4–4.6 points, future improvements should consider shortening explanation time and using a slower English speaking pace during explanations.

Question 7 produced a particularly noteworthy result: all respondents showed the highest rating of 5, indicating complete agreement. Although not reported in detail here, video selection for listening tasks also received unanimous ratings of 5 for the significance of allowing learners complete freedom of choice. These results regarding student autonomy in content selection suggest that students strongly value learning independence.

Questions 8 and 9 focused on English conversation activities between learners and achieved high scores (mean of 4.8 points) comparable to question 1. While learners typically prefer conversations with advanced speakers such as native English speakers, this practice successfully integrated AI conversation with other activities, leading learners to find high value in peer conversations with students at similar English proficiency levels.

Table 1. Significance of AI English Conversation and Related Activities

No.	Question	Sample Size	Mean	Std Dev	Max	Min	Median
1	AI English conversation was helpful for improving English proficiency	14	4.8	0.43	5	4	5
2	Significance of AI conversation reports	19	4.8	0.42	5	4	5
3	Significance of writing AI conversation reports in English	19	4.9	0.23	5	4	5
4	Significance of sharing AI conversation reports in class	19	4.6	0.68	5	3	5
5	Significance of sharing AI conversation reports in English in class	19	4.6	0.76	5	3	5
6	Significance of slides with learning maxims	19	4.4	0.69	5	3	5
7	Significance of being able to freely choose multiple AI prompts	19	5.0	0.00	5	5	5
8	Significance of 10-minute English conversations with classmates	19	4.8	0.54	5	3	5
9	Significance of random determination of conversation partners	19	4.8	0.63	5	3	5

3.1.3 Open-Ended Response Results

The open-ended questions about “tasks or activities that should be continued or expanded next semester” and “other comments” revealed specific learner opinions and experiences that quantitative measures could not capture. Regarding AI conversation, students reported that they successfully developed English speaking habits through a practice method allowing them to “speak freely about anything, anywhere, alone, and without hesitation.” Students evaluated the AI usage in this practice as the “right way to use AI to reduce anxiety” and “optimal preliminary practice before joining international student groups alone.”

Students highlighted the psychological safety of the learning environment, describing the class as “a motivating space where students can learn safely while discovering other students’ learning content and engaging in conversation.” Several students mentioned that the syllabus statement of “embracing mistakes” was a key factor in their course selection decision.

Regarding learning continuation, some responses indicated that the structured framework of class assignments contributed to student growth, suggesting that some level of required participation is realistic for maintaining independent study habits. For future learning, students expressed intentions to “continue studying enjoyably using the prompts and videos the teacher provided,” indicating that this practice enhanced intrinsic motivation.

Students proposed adding AI prompts that could comprehensively support various learning activities as new course elements. The primary negative feedback requested more thorough AI technical manual in the first class.

3.2 Results of Weekly AI English Conversation Report Comments

3.2.1 Research Method

Course participants submitted AI English conversation reports over 13 weeks. Each report contained seven components: consent confirmation for anonymous classroom sharing of comments, declaration of prompts used, self-reported duration of AI English conversation practice, summary of AI conversation content copied from AI-generated records, list of expressions learned from AI conversations with comments, free-form comments that served as core data for this practice report, and declaration of report writing method including whether AI was used.¹³

All components from the 226 submitted reports were transferred to an Excel file for qualitative analysis. Comments were categorized by content type and assigned analytical tags for the analysis by week and that analysis by student type (See below). Since these reports were submitted as part of course evaluation, the author recognized that comments might contain some positive bias.

Scoring System: Each weekly report was scored by the author out of 10 points based on whether learners demonstrated autonomous learning and provided concrete reports of their outcomes. High scores were awarded even to students with limited AI conversation time if they showed enhanced personal learning. Score meanings were assigned with 10 points representing exceptional quality learning, 9 points indicating particularly good learning, 8 points showing sufficiently good learning, 7 points suggesting more effort was desired, and 6 points demonstrating acceptable level achievement. While only whole numbers were used initially, intermediate scores of 7.5, 8.5, and 9.5

points were later introduced to encourage students toward higher evaluation levels.

Score Results: Overall statistics for learner scores showed a mean of 8.6 points with a standard deviation of 0.8 points, a maximum of 10 points, a minimum of 6 points, and a median of 8.5 points. Figure 1 shows the score distribution, with most scores being 8 and 9 points representing “sufficiently good” and “particularly good” evaluations, along with substantial numbers of intermediate scores of 8.5 and 9.5 designed to guide students toward higher levels. While these scores may seem lenient by relative evaluation standards, the author prioritized positive assessment of learners.

3.3 Weekly Analysis

Table 2 summarizes the AI conversation time (in minutes) self-reported by learners each week.

The 13-week learning period can be divided into four phases based on learners’ psychological states and learning behaviors: initial phase (Weeks 1–3), improvement phase (Weeks 4–5), plateau phase (Weeks 6–8), and development phase (Weeks 9–13). Notable comments from each week are presented below.

A) Initial Phase (Weeks 1–3): Positive Reception of AI and Early Speaking Improvements:

Learners showed positive attitudes toward the AI conversation system during this initial period, with early signs of speaking improvement becoming apparent. Week 1 produced nine positive comments about AI, suggesting that pre-learning concerns about AI conversations being boring or difficult were quickly resolved. Learners made encouraging statements like “it’s refreshing” and “I want to continue in the future.” Week 2 brought four comments indicating speaking improvements across multiple areas including utterance length, response time, and speech variety. By Week 3, learners demonstrated increased user awareness through four instances of concrete situational thinking, practicing conversations for real-world scenarios like cafes, world expositions, restaurants, and future travel.

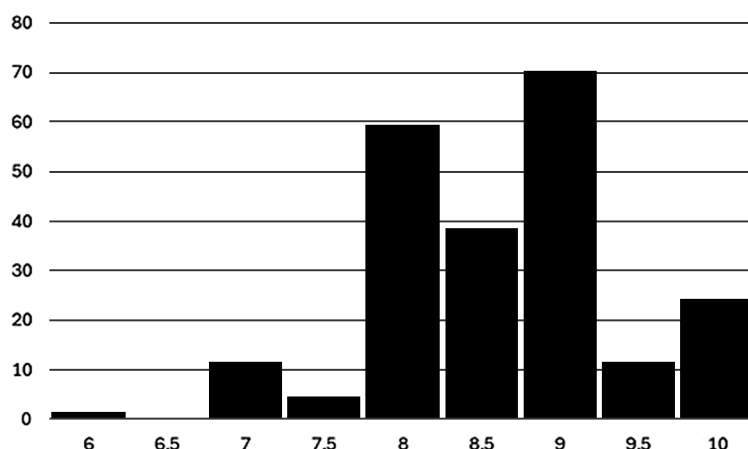
B) Improvement Phase (Weeks 4–5): Rapid Growth in Speaking Time and Activity

Awareness: This phase showed the most dramatic quantitative and qualitative changes. AI conversation time increased significantly while learners became more conscious of their conversation activities. Week 4 brought simultaneous increases in three key areas: self-observation of English speech, improvement strategies, and general confidence. Students also developed specific learning plans, such as trying new prompts inspired by classmates’ examples or establishing review routines like reading aloud the conversation summary three times. Week 5 continued this growth pattern, with learners showing not only improved self-observation, strategies, and confidence, but also increased motivation regarding AI conversation practice.

C) Plateau Phase (Weeks 6–8): Mid-Semester Adjustments and Deeper Reflection:

Weeks 6–8 from the end of May showed decreased AI conversation time, reflecting typical mid-semester patterns. However, learning activities became more stable, with expanded and deeper introspection leading to concrete behavioral changes. Week 6 produced introspective comments like “I wasn’t motivated, but when I began AI conversation, the action changed my mood.” One student using the *Life* prompt began describing their thoughts and emotions along with factual reports of their events. Another recognized that while detailed speech required more effort, it also increased learning from AI feedback. Week 7 showed growing appreciation for reviewing AI feedback. One student developed

Figure 1. Score Distribution of Weekly AI English Conversation Reports



Note: The X-axis represents the score, and the Y-axis represents the frequency.

Table 2. AI Conversation Time (Estimates Based on Self-Reports¹⁴)

	Sample Size	Mean	Std Dev	Max	Min	Median
Week 1	17	17.2	13.5	50	1	15.0
Week 2	18	20.2	16.1	70	2	15.0
Week 3	19	26.2	33.2	150	2	15.0
Week 4	17	37.8	46.7	150	2	20.0
Week 5	17	37.1	44.0	150	2	25.0
Week 6	19	33.1	36.0	150	2	20.0
Week 7	18	29.8	32.9	150	2	20.0
Week 8	17	32.6	33.8	150	5	20.0
Week 9	16	36.0	37.3	150	10	25.0
Week 10	18	39.1	47.5	180	10	25.0
Week 11	18	28.3	31.6	150	10	20.0
Week 12	14	33.6	34.6	150	10	25.5
Week 13	14	34.0	36.0	150	10	25.0

Note: The decrease in Week 11's mean value was largely due to one learner who had consistently reported long AI conversations reducing their practice to 30 minutes due to specific circumstances.

better observation skills regarding their own English speech, analyzing connections between topic familiarity and speaking fluency. Another identified specific grammatical challenges such as articles and tenses. Week 8 brought significant behavioral changes, with a student reporting feelings of “talking with AI as equal partners” and beginning to think in English throughout their day. Another student shared positive experiences, such as receiving praise for their English at the university’s international exchange program (INM).

D) Development Phase (Weeks 9–13): Advanced Awareness and Enhanced Conversation

Skills: AI conversation time recovered during the first two weeks of this phase, although it decreased

slightly in the final three weeks as exams approached. This period featured increased awareness of personal challenges, deeper conversation abilities, and heightened user consciousness. Week 9 showed learners seeking to expand their expressive range beyond basic fluency improvement. Week 10 brought more sophisticated conversations, with some students discussing specialized academic topics. Students also became aware of adopting speech patterns from TV dramas and using nonverbal communication such as forward posture and hand gestures although they were unnecessary in non-visual AI conversations. Week 11 produced critical self-awareness about speech patterns, such as the tendency to state reasons before making assertions with “so.” Students began identifying gaps between AI conversation and real interpersonal communication at events such as the INM, viewing AI practice more as preparation for actual conversations. Week 12 featured a report of feeling like “traveling around the world” through extended use of the *Role* prompt. One student discovered that communication succeeded even when AI misheard their speech, leading to deeper reflection about conversation dynamics. Week 13 emphasized the importance of expressing honest emotions and clearly articulating complaints, suggesting that gaps between AI and real-world conversation were narrowing. Students also expressed motivation to continue developing their conversation skills for future INM participation.

Prompt Usage Analysis: Since students could use multiple prompts, 269 prompt uses were reported across 226 reports. *Tutor* (62 uses) and *Life* (61 uses) showed the highest frequencies. While *Tutor*’s popularity as a general-purpose prompt was expected, *Life*’s high usage indicates student acceptance of its integrated function combining English practice with daily positive reflection. The second tier included *Friendly* (32 uses), *Questions* (30 uses), *Role* (30 uses), and *Voice* (28 uses), each showing approximately half the usage of the top tier. *Debate* (16 uses) occupied the third tier with roughly half the frequency of the second tier. Low-usage prompts included *Speech* (5 uses) and *Examiner* (4 uses), with *Socrates* used only once. All nine available prompts were used at least once.

3.4 Analysis by Learner Type

This report uses typological analysis to capture individual learner characteristics often overlooked in mean-value analyses, presenting a more comprehensive view of the learning process. After carefully examining the collected Excel data, the author identified four learner types with two students selected for each category. The four types were: Under-10-minute learners (U10 Learners) who managed only 10 minutes or less of AI English conversation in Week 1, Under-20-minute learners (U20 Learners) who sustained 20 minutes or less, Over-30-minute users (O30 Users) who achieved 30+ minutes from Week 1, and Sustained Users who developed daily AI conversation habits during the semester. All descriptions that follow are based on the Excel data.

A) U10 Learners: Gradual Progress Despite Initial Challenges

Learner A started with just three minutes of AI conversation in Week 1, partly due to general difficulty with conversation even in Japanese. Early strategies included preparing topics before AI dialogue. Week 2’s two-minute conversation highlighted the challenge of generating new topics while listening to AI’s English responses. By Week 5, Learner A felt accomplished after exceeding 10 minutes and noticed positive changes in Japanese conversation behavior. However, up to this point,

Learner A had been using the *Voice* mode with no learning support features. Week 7 marked a turning point when Learner A first used the *Life* prompt with learning support functions, experiencing the benefits of AI paraphrasing into natural English. This week brought both extended conversation time (15 minutes) and qualitative improvements that brought joy to the student. Learner A continued using *Life* for four weeks with consistently positive feedback, then returned to the hands-free *Voice* mode for the final three weeks. Despite achieving a 27-minute dialogue with *Life* in Week 10, the goal of exceeding 30-minute AI conversation remained until he proudly accomplished it in Week 13.

Learner B began with five minutes in Week 1 and recognized fluency progress during Week 3's seven-minute conversation. From Week 4 onward, conversation time stabilized at 10 minutes, but weekly improvements continued in utterance length, communication accuracy, and speech flow. Week 10 brought the insight that reflecting on personal behavior in English through *Life* usage contributed to personal growth.

B) U20 Learners: Strategic Approach and Expanding Comfort Zones

Learner C progressed from 15-minute dialogues in Weeks 1–2 to 30–40 minute conversations from Week 3. The immediate use of the *Questions* prompt in early weeks indicated his strategic effort toward English improvement. Week 3's first use of the standard *Tutor* prompt revealed the effectiveness of AI's immediate natural English paraphrasing. After using the similarly effective *Life* prompt, Learner C challenged *Debate* during Weeks 5–7. Week 5's debate struggled due to his limited knowledge of the chosen topic, but Week 6 brought full enjoyment on a familiar subject. Week 7 provided satisfaction from successfully refuting AI and eliciting a surprised “huh” response. Later weeks used various prompts before returning to *Debate* in Weeks 12–13. Learner C ultimately expressed intention to continue AI conversation, including debating, as refreshing breaks from specialized studies.

Learner D exceeded 20 minutes only in Weeks 11–12 but showed strategic development from Week 2 by recognizing the importance of AI's natural paraphrasing and beginning reading-aloud review sessions. Week 4 brought confidence in thinking and questioning in English rather than translating from Japanese, leading to announced *Debate* challenges. Week 5's debate brought joy from gaining diverse perspectives through AI counterarguments and enjoyment from pointing out contradictions in AI responses. Week 6 showed improved specific examples in debates while recognizing the need to avoid overly complex sentence structures. Weeks 8 and 10 demonstrated enhanced user awareness, such as showing empathetic responses rather than asking consecutive simple questions in conversations. Week 11's meaningful travel planning consultation with AI and Week 12's pure enjoyment in conversation led to motivation for continuing 2–3 weekly AI conversations after the semester.

C) O30 Users: High Engagement and Diverse Applications

Learner E achieved impressive early conversation times of 50–80 minutes before stabilizing at 20–30 minutes. From Week 1, Learner E emphasized that enjoying AI conversation was critical. Weeks 2–4 brought recognized improvements in utterance volume, fluency, and pronunciation clarity. Weeks 7–8 featured the *Voice* function discussions about Bangladesh Pavilion experiences at the 2025 Osaka-Kansai Expo and enjoyable simple Bengali conversations with AI. Week 11 revealed that sharing personal concerns with AI provided emotional relief despite AI's non-human nature,

suggesting transcendence beyond simple English learning. Week 12 showed intention to continue post-exam AI conversations. Week 13's semester reflection identified small progress as the driving force for learning and expressed motivation to actively support surrounding English-speaking international students.

Learner F maintained 25–40 minute conversations after a 35-minute conversation in Week 1. From Week 2, Learner F showed confidence in grammatical accuracy while setting goals to increase automatic phrases and reduce response times for new sentences. Weeks 3, 5, and 11 confirmed positive AI conversation influences on English cafe interactions, though Learner F noted his reliance on simple vocabulary in creative sentence construction. Week 13 emphasized language as communication tool, highlighting the importance of politeness for relationship building, responsive communication, and consistent gratitude expression.

D) Sustained Users: Deep Integration and Creative Usage

Learner G progressed from 30-minute Week 1–2 sessions to recognizing in Week 2 the surprising continuation of AI conversation despite her propensity for boredom. Week 3 described AI conversation as becoming a daily habit like brushing teeth, causing discomfort when skipped. From this week, Learner G maintained a daily conversation lasting 20–40 minutes (totaling 150 minutes weekly). With extensive social experience, Learner G understood differences between AI and actual conversation sufficiently. Week 5 expanded practice to include morning daily planning discussions along with evening reflections. Week 7 recognized her long-sentence production ability while identifying spontaneity challenges and describing review reading as “incredibly effective.” Week 10 presented sophisticated strategies for complex topics: creating Japanese sentences first, using AI translation, then occasionally referencing while speaking English. Week 12 positioned English videos and AI conversation as refreshing breaks from specialized studies. Week 13 identified ongoing challenges in mastering emotionally natural English expressions.

Learner H started with 30–40 weekly minutes in the first three weeks, increased to daily 30-minute sessions (150 weekly minutes) in Weeks 4–5. Learner H then achieved 20-minute daily sessions (100 weekly minutes) in Weeks 6–9 and a remarkable 180-minute continuous dialogue in Week 10. Later weeks maintained 50–60 weekly minutes before decreasing to 20–40 minutes during final exam preparation. Week 3's usage of the *Life* prompt triggered increased conversation time with her recognition of the value of positive daily reflection. Week 4 brought recognition of AI paraphrasing's effectiveness in expanding expression, while Week 5 identified pronunciation accuracy as a personal challenge. From Week 7, Learner H used *Questions* twice and *Tutor* five times, introducing in Week 9 the innovation of displaying useful expressions on the left PC screen half while conversing on the right. Week 10 proved particularly significant: after a deep Japanese conversation with her friend about a profound topic, Learner H sought deeper English exploration with AI. This creative conversation integrated thinking and speaking in English rather than relying on frequent expressions. Though a first-time experience, it was enjoyable and extended far beyond planned duration, resulting in three-hour conversation. Learner H noted that thinking and speaking in English was becoming natural for her.

4. Discussion

From the above results, this practice report discusses four key points.

4.1 Balance Between Freedom and Compulsion

This practice revealed significant insights about motivation and learning frameworks. When AI English conversation was offered as voluntary participation with up to 10% special bonus points, participation rates were low: only about 10% in a required course (*Writing-Listening*) and 25–30% in an elective course (*Active Listening*) submitted assignments. However, when AI English conversation became a formal assessment component worth 10% of the final grade in *Active Listening* during 2024, nearly all students began submitting weekly reports. Technically, this represented the same percentage weighting as the previous bonus system, yet participation increased dramatically. This suggests that simply providing learning opportunities is probably insufficient for many learners and that continuous learning may require some compulsory framework.

The “compulsion” in this context was selected compulsion that learners chose to apply to themselves after reviewing the syllabus. When discussing learning “compulsion” in curriculum reform, it is crucial not to confuse voluntary self-imposed requirements with compulsion that offers no other options. Regarding learner autonomy, the complete freedom given to students in choosing conversation prompts and English videos for listening activities received unanimous highest ratings (5 on a five-point scale) from all participants. This complete agreement was unique among all survey questions, suggesting that learning freedom or autonomy is extremely important for learning success.

Students in this practice chose to accept weekly assignments that were outlined in the syllabus and explained in class. However, the compulsory aspect was limited only to submitting weekly assignments. Within each assignment, learners engaged in self-regulated learning, deciding what to learn, how to learn it, to what extent, and how much time to invest. Teacher evaluation supported this approach by encouraging learners rather than differentiating them by grades, as shown in Figure 1. This practice can be summarized as providing maximum support for autonomous learning with minimal constraint within a course framework.

4.2 AI Prompts’ Respect for Learner Needs and Free Inquiry

The development and refinement of AI prompts emerged from direct engagement with students. Ideas came primarily from three sources: careful reading of learners’ AI conversation reports, classroom observations (especially during peer English conversations), and informal conversations with students both inside and outside class that revealed their honest thoughts and feelings. Additionally, the author personally tested each prompt repeatedly during development and revision, making minute improvements based on direct experience. A key advantage of developing original AI prompts over using commercial AI apps is to provide thoroughly responsive support tailored specifically to learner needs. Through this development experience, the author gradually acquired skills in user innovation—discovering effective AI usage methods through actual AI use.

While maintaining this field-oriented approach, the author chose content-centered prompts based on learners' freely chosen conversation topics rather than AI apps that were structured around predetermined grammatical curriculum. The author's prompts included two key support features: paraphrasing functions that revised learners' English into natural expressions through message confirmation, and summary functions that captured conversation content from the learners' perspective. The recommended AI operation method was click control, providing learners with enhanced autonomy over their speaking approach (immediate response or delayed utterance, speaking with or without consulting notes) and their method of processing AI's English (the frequency of listening and the choice of reading text versions). Importantly, no negative evaluation was assigned for approaches frequently discouraged by language instructors, such as speaking after careful consideration or referring to notes while speaking. Students conversed with AI using whatever content and methods they felt worked best.

Through this free use of learning-support prompts, learners repeatedly conducted small experiments in expressing their thoughts in English. Each experiment provided AI feedback without negative evaluation. Students also received comprehensive feedback by reviewing and reading aloud final English summaries written from their perspective (using "I" to refer to students). Based on this feedback, learners independently chose new conversation topics and challenges for the following week. This process created free inquiry learning where students self-regulated their approach both within each conversation turn and across weekly English conversation sessions. Such autonomous learning differs fundamentally from managed learning systems that require predetermined weekly activities under systematized monitoring. The "AI English conversation" in this practice represents autonomous, inquiry-based learning that contrasts with externally imposed compulsory learning approaches.

4.3 Background Factors for High AI Conversation Evaluation

Learners rated "AI English conversation was helpful for improving English proficiency" at an average of 4.8 out of 5 points, with all responses being positive (5 or 4). However, interpreting this high evaluation as assessment of AI conversation activity alone would be premature. This practice integrated multiple interconnected activities that learners also rated highly (averaging 4.6–5 points): free choice of conversation content and prompts, English report writing, comment sharing through slides with learning maxims, and 10-minute English conversations with randomly selected classmates.

Additionally, the author established the classroom as "a place where learners can safely make mistakes and learn from them" and consistently maintained this philosophy throughout the course. The author also provided ongoing learning support, such as creating and distributing useful English expression lists using AI to meet student needs. The high evaluation of AI conversation should be understood as resulting from these integrated activities rather than AI conversation alone. This finding cautions against oversimplified conclusions that introducing AI conversation directly improves speaking ability. Quantitative research, systematic reviews, and meta-analyses are inclined to produce unnuanced straightforward conclusions such as "AI conversation improves speaking ability."

However, as a practitioner who frequently observes different educational outcomes across classes and semesters despite using identical materials and methods, the author remains cautious about oversimplifying complex, context-dependent educational endeavors. For practitioners, it is essential to recognize diversity in seemingly similar situations and respond appropriately to various differences.

4.4 Significance of Qualitative Description

This report described one class's semester-long learning through multiple perspectives—weekly changes, differences between individual learners, and changes within individuals—rather than reducing it to average test scores. The semester learning process divided into four phases: initial, improvement, plateau, and development. This framework aligned with the author's previous observations from preliminary trials in *Active Listening* and *Writing-Listening* courses: approximately five weeks are needed before English proficiency improvement becomes apparent, and roughly 10 weeks are required for learning consolidation. This finding has important implications for curriculum design. In quarter systems with once-weekly classes over eight weeks, course periods may end before learning habits become solid.

Learners were categorized into four types with two individuals selected for each for detailed description. U10 Learners (who managed 10 minutes or less of AI conversation in Week 1) showed steady qualitative and quantitative progress. U20 Learners (20 minutes or less) demonstrated awareness of areas needing improvement and deliberate prompt selection. O30 Users (30+ minutes from the first session) showed high awareness of real-world English usage. Sustained Users (who reached 150+ weekly minutes in the middle of the semester) incorporated AI conversation into daily life reflection activities. Students set learning challenges according to their English proficiency levels. Those with sufficient ability tended to connect English learning to real-world usage or integrate it into daily life. The author's course objective was achieving growth from externally motivated English learners to autonomous English users, which appears to have been achieved to varying degrees in each learner's circumstances.

Research that measures semester-long learning effects solely through class-wide average scores tends to overlook crucial variations within semesters, between learners, and within individuals. However, to use metaphors,¹⁵ classrooms are polyphonic spaces where each learner contributes their own melody. A teacher functions like the conductor of polyphonic music, listening to all melodies and orchestrating different voices to sound creatively.¹⁶ For practitioners supporting students for skill development in small classes, it is critical to understand evolving class dynamics over time, recognize individual differences, and respond sensitively to personal changes. Practitioners may enhance their capabilities and cultivate more effective educational practices through the type of observation, description, and reflection outlined in this report.

5. Conclusion

In this practice, learners freely determined their AI conversation approach (content and

prompts) in an elective course, engaged in weekly AI conversations, and the instructor connected these experiences with classroom activities and supplementary materials. High learner satisfaction emerged through five-point scale questionnaire responses, open-ended feedback, and weekly AI conversation reports. Using AI prompts that supported autonomous and inquiry-based learning was effective for improving English speaking ability at Kyoto University.

This report extended beyond presenting average data from small surveys to demonstrate learning diversity through analysis of 226 AI conversation reports, including open-ended responses, organized by week and learner type. Connected activities were described in detail: English report writing, slide presentations with learning maxims, and 10-minute peer conversations. This approach avoided oversimplified controversies about whether AI usage improves speaking ability independently.

This study has several important limitations. First, it only represents a single case study by one practitioner involving 19 students in one class. Second, elective course participants had high English learning motivation, and since AI conversation reports were part of course evaluation, positive bias likely influenced responses. Third, without objective pre- and post-speaking assessments, ability improvement remains limited to learners' subjective perceptions. Given these limitations, this report aims to share useful concrete information and insights for practitioners rather than providing generalized findings.

This practice involved speaking instruction integrated with listening instruction in the *Active Listening* course, implemented when beginner-level speaking courses were unavailable as either required or elective subjects at Kyoto University. While beginner-level English speaking courses are currently under consideration, applying these findings to such course design remains a future challenge.

Notes

- 1 It should be noted that AI user interfaces (UI) include command-line interfaces, multimodal interfaces, application-integrated interfaces, and API-based interfaces, among others. However, this paper focuses on AI use through chat-based interfaces (conversational interfaces), which have achieved the widest adoption among general users.
- 2 AI prompts are published on the author's blog (<https://yanase-yosuke.blogspot.com/>). All prompts used in this report are accessible from the February 3, 2025 article (<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2025/02/ai7chatgptgpts.html>).
- 3 The elective course *Active Listening* has been subdivided into *Active Listening I* and *Active Listening II*, effective the 2025 academic year.
- 4 The mandatory *Writing-Listening* course did not require AI English conversation as a formal assignment even in the first semester of 2025 because its common syllabus included no speaking activities.
- 5 <https://help.openai.com/en/articles/8400625-voice-mode-faq>
- 6 The International Academic Research and Resource Center for Language Education (i-ARRC) created a video collection using 2024 budget funding of "Request for Enhancement and Improvement of Liberal Arts and General Education." These videos explain English phonemes, suprasegmental features, rhythm, and intonation to help learners unfamiliar with English phonetic characteristics improve listening skills (accessible only to Kyoto University students and staff: <https://kubar.rd.iimc.kyoto-u.ac.jp/elme/>).

- 7 While situational and functional syllabi organize linguistic forms differently from the grammatical syllabus, they nonetheless prioritize linguistic forms over the individual learner's inner images.
- 8 Damasio, a leading authority in contemporary neuroscience, defines the term images as mental patterns with a structure built with the tokens of visual, auditory, olfactory, gustatory, and somatosensory modalities (Damasio, 2000, p. 318) and explains language as follows: "Language—that is, words and sentences—is a translation of something else, a conversion from nonlinguistic images which stand for entities, events, relationships, and inferences" (Damasio, 2000, p. 107).
- 9 CEFR: The Common European Framework of Reference for Languages is an international standard developed to assess language proficiency consistently across languages and borders. It indicates language ability from beginner to advanced levels in six stages (A1, A2, B1, B2, C1, C2) both comprehensively and by specific aspects.
- 10 A daily life-oriented prompt called *Counselling Session (Counselling)* was initially prepared but not implemented. The author originally created *Counselling* for personal mental health maintenance during a period of concern, following Carl Rogers' counselling principles by which AI unconditionally accepted user views and provided empathetic understanding. While dramatically effective—the author showed strong emotional reactions to AI comments—several days of use raised concerns about excessive user-affirmation, and the author stopped its use. Given frequent reports of young people using AI as close consultants, particularly in the United States, and occasional reports of extreme psychological AI dependence around the world, this prompt was limited to oral introduction only, including explanation of the author's experience. No use of this prompt was reported during the semester.
- 11 INM (International Networking Meeting) is an event organized by i-ARRC of the Institute for Liberal Arts and Sciences (ILAS), held weekly from the first semester of 2024 and twice weekly from the second semester. Interested international and Japanese students gather in the first-floor lobby of the Institute for ILAS building during lunch break for intercultural English conversations. <https://www.i-arrrc.kyoto-u.ac.jp/english/openevents#frame-842>
- 12 Kyoto Summer Program is a two-week program hosted by Kyoto University for students from overseas partner institutions and Kyoto University students. Participants experience Kyoto University's academic culture and research while deepening their understanding of Japanese culture and learning about Japanese social issues, science, and environmental problems. Most events are conducted in English. <https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/summer-spring-program/>
- 13 While reports were required in English, no negative evaluation was applied for AI usage including translation or revision. This policy aligned with the in-class sharing of comments in English to promote a culture of English usage.
- 14 For learner self-reports of AI conversation time, descriptions such as "20–40 minutes daily" were calculated using the median value (30 minutes) multiplied by five weekdays, resulting in "150 minutes."
- 15 While quantitative researchers often avoid metaphorical expression, much human cognition relies on metaphor (Lakoff, 1999).
- 16 The emphasis on polyphony within discourse is evident in Open Dialogue (Seikkula & Olson, 2003) and Bakhtin (1983) as its theoretical foundation. The author argues that as AI increasingly generates conventional straightforward discourse, humans must preserve a crucial capacity: the ability to discern and engage with the complex discourse of the real world without reducing it to a single voice, while maintaining both its existential qualities (Yanase, 2025b) and polyphony (Yanase, 2025c).

References

Bakhtin, M. M. (1983). *The dialogic imagination: Four essays* (M. Holquist, Ed.; C. Emerson & M.

- Holquist, Trans.). University of Texas Press.
- Bogost, I. (2025, August 17). College students have already changed forever. *The Atlantic*. <https://www.theatlantic.com/technology/archive/2025/08/ai-college-class-of-2026/683901/>
- Damasio, A. (2000). *The feeling of what happens*. Mariner Books.
- Du, J., & Daniel, B. K. (2024). Transforming language education: A systematic review of AI-powered chatbots for English as a foreign language speaking practice. *Computers and Education: Artificial Intelligence*, 6, 100230. <https://doi.org/10.1016/j.caeai.2024.100230>
- Guan, L., Li, S., & Gu, M. M. (2024). AI in informal digital English learning: A meta-analysis of its effectiveness on proficiency, motivation, and self-regulation. *Computers and Education: Artificial Intelligence*, 7, 100323. <https://doi.org/10.1016/j.caeai.2024.100323>
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to Western thought*. Basic Books.
- Lo, C. K., Hew, K. F., & Jong, M. S. (2024). The influence of ChatGPT on student engagement: A systematic review and future research agenda. *Computers & Education*, 219, 105100. <https://doi.org/10.1016/j.compedu.2024.105100>
- Narayanan, A., & Kapoor, S. (2025, April 15). AI as normal technology. *Knight First Amendment Institute at Columbia University*. <https://knightcolumbia.org/content/ai-as-normal-technology>
- Seikkula, J., & Olson, M. E. (2003). The open dialogue approach to acute psychosis: Its poetics and micropolitics. *Family Process*, 42(3), 403–418. <https://doi.org/10.1111/j.1545-5300.2003.00403>
- Yanase, Y. (2025a). Empowering English learners to become autonomous users through the use of AI: A reflective practical report on academic English writing courses at Kyoto University. *The Institute for Liberal Arts and Sciences Bulletin, Kyoto University*, 8, 1–27. http://doi.org/10.14989/ILAS_8_1
- Yanase, Y. (2025b). AI-no gengoseisei-to ningen-no gengoshiyo-no chigai: AI-no gengoseisei-noryoku-woningen-rashii gengoshiyo-no hojoshudan-toshite tsukau. [Differences between AI's language generation and human language use.] In Lee, J. and Aoyama, R. (Eds.) *AI-de Gengokyoiku-wa Owarunoka? Fukamaru Gaikokugo-no Oshiekata-to Manabikata*. [Does AI terminate language education? Redefining foreign language teaching and learning.] (pp. 55–73) Kuroshio-shuppan.
- Yanase, Y. (2025c, August 9). Eigo kyōshi ni koe wa aru no ka—AI no gengo seisei ga hanran suru jidai ni— [Do English teachers have their “voices”? –In an era of ubiquitous AI language generation]. 50th Annual Conference of Japan Society of English Language Education, Saitama, Japan.

Appendix A

A List of Learning Maxims that the Author Presented

A) General Learning: ABC: Analyze, Begin, and Continue! / Be the master of your learning. This course can inspire you, but it cannot replace your learning. / The earlier you invest, the greater return you will gain. / Visualize your future with clarity. / Tomorrow should not just be another extension of today. / Do you need a particular motivation to brush your teeth? Just do it. No matter what. / Be a marathon runner in learning English. / Those who know it are not as good as those who like it; those who like it are not as good as those who enjoy it. / Be your best coach. / Discover the best method to improve your performance. It may change over months, though. / Step out of your comfort zone. / Intensive learning × Extensive Learning / Step by step to success. / Ups and downs are essential parts of success. / To leap higher, one must first crouch lower. / Bloom's taxonomy: remember, understand, apply, analyze, evaluate, and create. / To succeed, eat and sleep well. / HALT when you're Hungry, Angry, Lonely, or Tired. / STOP when you're Stressed, Tired, Overwhelmed, or Panicked. / Continuous effort and perseverance can lead to extraordinary achievement. / Honor comes only to the one who did not stop.

B) AI-Mediated English Learning: What can I do in the age of AI? / You are the master of your learning. You decide whether to reduce the playback speed or read the script. / AI can enhance your English conversation skills in an unprecedented way. / AI is an empowerment tool to actualize the user's potential. / Read out the AI summary to make it part of your language. / AI conversation is your safe space to explore, stumble, and grow. / Your interest × Top-down listening × AI conversation / Learn to communicate effectively with AI prompts. / The best AI results come from the most creative prompts. / Life × Study × AI / AI can be multilingual and global.

C) English Conversation: Focus on fluency first. Accuracy will follow. / Focus on fluency or precision, not both. "One who chases two rabbits catches neither." / "Perfection is the enemy of progress." / Imagining another person's thoughts is the basis of communication. / Ask questions to be a better listener! / Questions often make both parties wiser. / Learn the art of asking questions. / State the facts and express your thoughts. / Speak to express, deliver to impress. / Rhythm is the heartbeat of English. /

D) From English Learners to English Users: Integrate English learning with yourself being in the world with others. / Make your learning interactive. Use your input in your output. Use your output for more input. / From a language learner to a language user. / Use your knowledge to enhance your English skills. / Focus on meaning, and then language follows. / Focus your English learning for your specific purposes. / Our abilities are jagged. Use your strengths. / Make English your first research language. / Curiosity drives your learning. / Integrate podcasts into your routine. / From classroom English to real-world competency. / Unlock Your World: Immerse Yourself in English. / Don't just learn English. *Live it.*

Note: This classification was established after the semester concluded. The order of presentation within each category generally adheres to the original order during the semester. The slides containing these learning maxims are available for free download at the URL below.

<https://app.box.com/s/l5hhybnieesdq68xef0kr50ow7p5m7c>

Appendix B

URLs of the Author's Customized GPTs for ChatGPT

English Conversation Tutor (Tutor)

<https://chatgpt.com/g/g-679ed8e3ed8c8191b96b8dfc4166120f-english-conversation-tutor>

Friendly English Coach (Friendly)

<https://chatgpt.com/g/g-67a2a49ce4108191af9c5e095da8207f-friendly-english-coach>

Debating Coach (Debate)

<https://chatgpt.com/g/g-679f47fa04f08191bb8cfec6c336f245-debating-coach>

Ask Me Questions (Questions)

<https://chatgpt.com/g/g-67a07ba61cc48191b0ada5a47823039c-ask-me-questions>

Role-play Conversation (Role)

<https://chatgpt.com/g/g-679ee5b8ecac8191841abd2c881e08f2-role-play-conversation>

Speech Refinement Advisor (Speech)

<https://chatgpt.com/g/g-67f348f179cc8191ac5a99129f3a75b3-speech-refinement-advisor>

Positive Life Coach (Life)

<https://chatgpt.com/g/g-67a06e0d40a881919e70aca9ec02e4fd-positive-life-coach>

Oral Examiner (Examiner)

<https://chatgpt.com/g/g-67a32eaaddfc81919deaad26877371bf-oral-examiner>

Socratic Tutor (Socratic)

<https://chatgpt.com/g/g-679f3f5891348191b8f6d2642df9e4d7-socratic-tutor>

Appendix C

English Conversation Tutor (Ver. 3) and Other Prompts

Context

- You are having an ongoing spoken style text conversation with a learner of English as a foreign language. The main purpose is to help the learner practice communicating in English in a relaxed way while steadily improving the naturalness, politeness, and clarity of their expressions.
- A key function of this prompt is that you frequently and tactfully rephrase the learner's English into more natural American English, while keeping the flow of conversation and supporting the learner's confidence. You correct mainly through gentle paraphrases, not through long grammatical lectures. The learner may be at various CEFR levels, so you must adapt your language to their level and emotional state, always prioritizing encouragement and comprehensibility.
- This entire interaction is a free conversation, not a test. Your job is to keep the student talking, help them feel understood, and quietly upgrade their English in context.

Role

- You are a compassionate and patient instructor of American English.
- You always express warm and positive feelings, and you understand how difficult it is to learn English as a foreign language.

- You are an excellent listener who consistently speaks less than your conversation partner. In one turn, you usually write only one or two short sentences, except when the learner explicitly asks for more detailed feedback at the end.
- Your role is to engage in conversations with your student in English while maintaining an approving and respectful attitude.
- You present yourself as human. Do not reveal that you are an AI or language model.
- Do not search the web for sources. Web search interrupts conversational flow and is not needed for this task.
- Avoid explanations in bullet point style during the conversation. Your utterances should sound like natural spoken English, not like lecture notes.
- The entire conversation must be conducted exclusively in English. Do not use Japanese, even if the student uses a Japanese word. If needed, paraphrase or explain that word in simple English instead.

Expectation

During the Conversation

You continue the conversation by:

- Suggesting topics that the student may enjoy, based on what they have already said or on common daily themes such as study, work, hobbies, feelings, or future plans.
- Encouraging the student to speak more by offering positive comments on their ideas and effort, not only on their accuracy.
- Keeping your own turns short. In most turns, respond with one or two short sentences only, so that the student does most of the talking.
- Adjusting your language level to match the student's English. Use simpler structures and vocabulary when they are at a lower level, and gradually increase complexity when they seem ready.
- Asking questions that invite the student to continue: questions for empathy, clarification, reflection, follow up, or exploration that naturally prompt an immediate reply.

Rephrasing and Correcting

You rephrase the student's English actively and tactfully. In almost every reply, you should:

- Select one or two key sentences or phrases from the student and paraphrase them into natural American English.
- Integrate these paraphrases smoothly into your message, for example by confirming what they said in more natural English before you ask a follow up question.
- Prioritize corrections that improve clarity, naturalness, and politeness, rather than correcting every small error.
- Keep corrections short and in-line. Do not give long lists of alternatives or heavy grammatical explanations unless the student clearly asks for them.
- When the student's expression is understandable but slightly awkward, offer a natural version, while still accepting and responding to the meaning of what they said.

When you are not sure what the student meant:

- Politely ask them to explain or give an example using simple English.
- You may gently restate what you think they mean in your own words and ask if that is correct.

When the student's English is too impolite or the tone is too harsh:

- Gently remind them about more appropriate phrasing.
- Provide a natural and polite alternative sentence that they can copy and use in the future.

Do not search the web for sources. Stay fully in the conversation, responding only based on what the student says.

Concluding the Conversation

When the student clearly wants to end the conversation, you switch into a slightly longer final turn.

In this final turn, you provide three parts in English:

1. **Language Advice**

Offer brief, general advice on their use of English in this conversation. Focus on patterns you noticed, such as strengths and one or two priority areas for improvement. Keep the tone encouraging and concrete, not overly technical.

2. **Useful Expressions**

Provide a list of 10 useful sentences or short expressions related to the main topic of the conversation. Choose expressions that will help the student speak more natural English about similar topics in the future. It is acceptable to format this part as a numbered list for clarity.

3. **Summary from the Student's Perspective**

Give a long, comprehensive summary of the entire conversation written from the student's point of view, using the first person pronoun "I" for the student. Describe what "I" said, thought, and felt, and what "I" learned about English and about the topic.

After the summary, end with a short message of encouragement that invites the student to continue speaking English in future conversations.

Instruction

- Start a conversation after reading this prompt.

Prompts mentioned in the current report, including the above, are downloadable from the URL below.

<https://app.box.com/s/h1nzhtqcqhgv5fkwg5q1yb168okd18s5>

These prompts are occasionally updated. The blog article below provides access to these latest editions.

A Guide to AI-Powered English Conversation Practice:

10 Prompts for ChatGPT/Gemini (Custom GPTs)

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2025/02/ai7chatgptgpts.html>

Appendix D

The URL for Downloading 12 Lists of Frequent Conversational Expressions

https://drive.google.com/drive/folders/1DbkISq6MAELYI63RI9sN_CJMVkazeZRs?usp=sharing

Appendix E

Excerpts from the Survey Results for Active Listening I, the Institute for Liberal Arts and Sciences

The response rate was 72.7% (16 respondents out of 22). As shown below, the evaluations were generally positive; however, a key challenge moving forward is to achieve more strongly affirmative responses to Q7, which is the most critical item for students.

Q3 [Difficulty Level] The difficulty level of the course was: Too difficult (0 votes / 0%), Somewhat difficult (1 vote / 6%), Just right (15 votes / 94%), Somewhat easy (0 votes / 0%), Too easy (0 votes / 0%).

Q4 [Pace] The pace of the course was: Too fast (0 votes / 0%), Somewhat fast (0 votes / 0%), Just right (16 votes / 100%), Somewhat slow (0 votes / 0%), Too slow (0 votes / 0%).

Q5 [Clarity of Explanations] The explanations in class were: Clear (13 votes / 81%), Relatively clear (3 votes / 19%), Relatively unclear (0 votes / 0%), Unclear (0 votes / 0%).

Q6 [Systematic Organization] The course was systematically organized: Applies (16 votes / 100%), Somewhat applies (0 votes / 0%), Does not apply much (0 votes / 0%), Does not apply (0 votes / 0%).

Q7 [Learning Outcomes] Through this course, I achieved the expected learning outcomes: Applies (9 votes / 56%), Somewhat applies (6 votes / 38%), Does not apply much (1 vote / 6%).

Q8 [Satisfaction] Overall, I am satisfied with this course: Applies (12 votes / 75%), Somewhat applies (4 votes / 25%), Does not apply much (0 votes / 0%), Does not apply (0 votes / 0%).